

回顧小説

「辻遊郭」

沖縄の歴史から消えた街

横山英昭 著



回顧小説「辻遊郭」
沖縄の歴史から消えた街

横山英昭
著

一 天空の富士

「よろしかったら、富士山をご覧になりませんか？」

普段、隣席の客に声を掛けることなどしない東山である。だが、この日ばかりは何故か違った。

窓から見える絶景を一人占めしている自分に、多少後ろめたさがあったからである。隣人は静かに、身をかがめるようにして彼越しに窓の方を見た。

「何も見えませんけど…」

隣人は呟くように言った。

見るとその視線は宙を見ている。

「もつと下です。下…」

隣人は東山に言われるままに目を下に向けた。

「うわー、すごい。私、上とばかり思っていたわ」

「……」

「綺麗ね。富士山、見たの、何年ぶりかしら…」

隣人はしばらくじっとして見ていた。

見終わると席に座りなおすし、東山の方を向いて丁寧な礼を言った。

「良いものを見せていただきましたわ。ありがとうございました」

「どういたしまして。あまり綺麗なので、つい教えて差し上げたくなりましたね」

見れば隣人は50歳半ばだろうか、黒いスーツを着た美しい顔立ちのご婦人である。

一見着こなしてから受ける印象が、法事か催事の後のような。

とても観光旅行には思えない。

それも一人旅のようだが、ちよつと気にはなる。

「沖繩には観光旅行ですか？」

東山はそれとなくたずねてみた。

「いいえ、島に帰りますの」

「お里帰りですか？本土の方とご結婚されたとか」

「結婚ですか？私でなく叔母ですよ。新潟へ、それも豪雪地帯の方と」

そう言つて婦人はクスツと笑つた。

「沖繩の女性が、本土の方とご結婚するのは珍しくありませんか？」

「今でこそ珍しくないのですが、昔のことですから親や周囲の反対にあつて大変だつたようです」

「叔母さまは勇気がある方ですね」

「当初は永住覚悟だったようですが、歳をとるに連れ里心が出て、毎年のように島に帰って来ていました」

婦人は自分のことのように話し始めた。

東山も何故かその先を聞きたくなくなった。

「それで？」と尋ねた。

「叔母は看護師でしたが、定年退職すると急に田舎に帰りたいたいと言いだしたのです。年老いた親のことが心配だったのでしょね」

「……」

「ところが叔母は突然腰の重い病気になり、入院してしまいました。島に帰ることさえ出来なくなり、寂しくしています。それで私と妹が交代で月に一度お見舞いに行くようになりましたの」

「そうでしたか。大変ですね。で、叔母さまはこのまま新潟でお暮らしですか？」
「そうなると思います」

婦人はいつの間にか小さなメガネをしていたが、それをそつと取るようにして目頭を拭いた。

東山は話題を変えて、自分のことを話すことにした。

「僕は仕事で出張なんです」

「どんなお仕事ですか？」

「建築士です。僕も遠に定年なんですけど、建築が好きで今も現役で働いているんです」

「沖縄でビルをお建てになるのですか？」

「いや、ビルじゃないのですが、友人がトラブルに巻き込まれたらしく、その相談に呼ばれましたね」

「トラブルって、どんな？」

「友人の話だけでは様子がわからないのです。ただ店舗を増築しようとしたら、役所からストップが掛かった、というのですね。届けを出す必要があるのだと思います」

「地元の建築士さんではダメなのですか？」

「ダメじゃないのですが、建物というのが僕の開発した可動建築なんです」

「可動建築？」

「難しい話になってごめんなさい。僕はこれからの沖縄には新しい建築が必要と考えてきました」

「沖縄はコンクリートばかりですものね」

「そう。でも昔の沖縄には本土のように木造が沢山あったのです。ところが戦後、米軍施設の影響でコンクリートが普及した。街はビルで埋まり、沖縄らしさが失われて行ったんですね。都会は仕方ないとしても、離島や田舎にまでコンクリートにするのは、自然破壊につながります。さりとて木造は資源もなく、シロアリにも弱い。考えられるのは鉄しかない」

「なるほどね。素人でも理解できます」

「それで数年前から可動建築を開発し、沖縄の護国神社で一年間使っていたけど、ストしてもらいました。その後、友人が事務所にもリサイクル使用したという訳です」

「面白いお話ですね。夢があつて楽しいこと」
「ですから僕でないと今回のトラブルは解決できませんし、僕の責任でもあるのです」

「よくわかります」

婦人はそう言つて正面を向いた。

東山は自分が多少興奮気味に話していることに気付いた。

《初対面の人に、なぜこんな話までしたのだろう》

婦人は疲れたのか、正面を見たまま動かない。多分眠つたのだろう。

それにしても、なんと静かな雰囲気の女性だろうか。

自分がここまで話すことなど思いもよらないことだった。

いや、話したのでなく、話させられたのだ。

いつの間にか彼女の世界に引き込まれてしまった。

彼は婦人の顔を、もう一度良く見たい衝動に駆られた。

でもそれは男として恥ずかしい。

第一女性に失礼ではないか。

《きつと叔母さんの看病に疲れたのだろう。叔母さんは病院だろうか。彼女が脇に座っている。果物を剥いている。病室に陽が入り、彼女が叔母さんに微笑みかけている。優しい笑顔だなあ……》

彼もいつの間にか眠りに落ちていた。

突然、婦人が小声で言った。

「もうすぐ着きますかしら？」

「ええ、もうすぐですわね」

東山は婦人との会話がまだ続いていることが多少嬉しく感じられた。

「お話できて楽しかったわ。一人旅は退屈ですものね」

「……」

「ありがとうございます。またいつかお会いできますように」

「いや、僕こそ。失礼しました」

「……」

東山は意を決したように名刺を取り出し、婦人に渡した。

「東山と申します。何か建築のことでお困りの時は、思い出してください」

彼女は名刺を受け取ると、しばらく考えて言った。

「わたし、那覇で妹とお店をしています。よろしかったらいらしてみてください」

「お店って、クラブですか？」

「ええ、カウンターも御座いますからお一人でもどうぞ」

「そうでしたか、やっぱり」

「やっぱり？」

「いやこれは失敬。貴女の立ち振る舞い、只者じゃないと勝手ながら想像しておりました」

「殿方は想像逞しいのですね」

彼女も笑いながら名刺を東山に渡した。

「《雅》ですか。いい名だ。ぜひ寄らせていただきます。男の単身赴任も結構夜はヒマですから」

「お待ちして居りますね」

彼女はすっかりお店の経営者になっていた。

飛行機が那覇空港に着陸し、ボーディングブリッジを出ると、彼女は東山に軽く会釈をし、足早に乗客の中へと消えて行った。

一一 単身赴任

東山が、首里にある友人根間の事務所の役所届けを引き受けたのは、それから1週間足らずのことであった。

沖縄の那覇市、とりわけ首里という地域は歴史的建造物や史跡が多く、環境規制や建築制限が他地域に比べ厳しい。

今回違反に問われた背景には、環境を護ろうとする住民の強い思いがある。生半可な対応では解決は難しい。

ここは思い切って正面から取り組む必要がある。

かつて日照問題で建設反対にあい、建設が頓挫した案件を数多く見てきた。建築の私権は、これからますます制限されるだろう。

東山は熱意を込めて根間を説得した。

根間も東山に問題解決を依頼した。

再び那覇に飛んだ東山は、まず那覇市役所の都市計画課を訪れた。

若い担当職員が応対してくれた。

首里当蔵の案件で伺った旨を伝えると、厳しい反応が返ってきた。

「違反建築になっていきますので、撤去していただくか、確認申請の許可を取っていただく必要があります。建築確認の前にこの地域は環境条例の特別対象地域ですので、そちらの許可がまず必要となりますね」

「わかりました。期間はどのぐらいかかりますか？」

「なんとも言えませんが、誠実にご対応いただいたとして、最低でも二三か月はかかるのではないでしょうか」

「その間、営業は続けられますか」

「それは建て主さんのご判断で。ただし増築工事を続けることはできません」

「環境条例の概要をご説明頂けますか？」

担当者はパンフレットを示し、手続きの流れを説明した。

「この地域は沖縄の伝統的な赤瓦の使用をお願いします。ただし赤瓦の屋根には国の助成金が一部用意されています」

「なるほど、でも自己負担が大きくて従えない場合はどうなりますか？」

「これはあくまで行政指導で、法的強制力はないのですが、今後図面をお持ち頂ければ具体的なお話をさせていただきます」

「わかりました。では宜しく願います」

東山は礼を言い、隣室の建築指導課を訪ねた。

こちらはすでに問題案件と認識されているのか、すぐ担当者に会うことができた。東山が名刺を差し出すと、快く応対してくれる。

「東京の建築士さんですか？」

「はい、私が開発した可動建築ですので、私が責任を持って対応させていただきます」

「こちらにずっとおられるのですか？」

「いえ、単身赴任で参ります。環境条例もありますし、解決が難しい建築でもありますから最初から最後まで私がいたします」

「出張費用も大変でしょう？」

「クライアントが長年の友人ですし、可動建築の良き理解者ですから、最後まで頑張りますので宜しくお願い致します」

「わかりました。凶面ができたら事前協議にお越しく下さい」

市役所を出ると、あらかじめ定宿に決めてあった役所近くのホテルに戻り、シャワーで汗を流した。

三 可動建築

東山が何故、可動建築を提唱するようになったのか。

2011年3月11日に起きた東日本大震災がきっかけと思われているがそうではない。

この時既に試作され、沖縄と千葉に設置されて実用化されている。

ただ東山にとってこの大震災が可動建築に提唱する引き金になったことは確かかなようだ。

彼が可動という言葉に拘るのは、移動でも固定でもなく、「動かしたい時に動かせる」意味を表現したかったからである。

つまり建築の形態を意味しないで、動機と行為を一体的に表しているに過ぎない。建築を「動かしたい」動機には様々ある。

しかし建築と言った途端に、誰もが建築は動かないものと決めつけてしまう。

だから動機のイメージがわからないのである。

ところがもし震災仮設建築なら、誰しもイメージできる。

役目のために現場に向き、役目を果たしたらその場から動かしたい、と思うからである。

では行為の方はどうか。

こちらもイメージが湧きづらい。

よくあるイメージがコンテナハウスであるが、可動建築のすべてがコンテナハウスではない。

トレーラーハウスも可動建築であるし、豪華客船もクルーザーも、広い意味での可動建築である。

このように可動建築の概念は曖昧で、時に建築行政を悩ませる。

我が国では、建築である限り確認申請を義務付けているし、建てて良い地域も法律や条例で定められている。

建てるということは、地盤に強固に固定することであるから、建築であればすべて固定せよということになる。

東山は可動建築でも建築として使用している間は、既成の制度に従うべきであると考えている。

移動可能な固定建築の法律で一律に規制することが果たして意味があるのか。

一年程度で撤去する建築物には仮設建物があるが、災害仮設、工事仮設など用途に制約がある。

つまり現状の法体制ではすべての可動建築に対応できていないのである。

あの大震災の日の午後、東山は自宅に近い幕張の海岸を、いつものように愛犬と散歩していた。

あの魔の時刻、岸壁を突然の揺れが襲い、地面が割れ、電柱が傾き、彼は地面に屁立った。

《これはただ事ではないぞ》

揺れが落ち着くと、急ぎ自宅に戻った。

彼の住まいは高層マンションの15階だが、下から見上げた限り異常はなさそうだが、しかし周囲は波うち、ところどころ液状化している。

東山も経験したことのないほどの大地震であり、職業柄建築の被害の大きさが脳裏に浮かんだ。

玄関を開けて部屋に入ると、家族が青ざめた顔で彼を迎えた。

免振工法のマンションのためだろうか、心配したほど家中が散乱してはいない。

彼はテラスに出て、東京湾のほうを見やった。

心なしか水面は引いているか、それよりも彼がいた岸壁が周囲より沈んだかのように見える。

遠く湾越しに房総半島の方を望むと、市原当たりだろうか、もうもうと黒煙が上がっている。

その中に真っ赤な炎も。

「石油コンビナートが燃えているぞ」

東山は事の重大さがわかった。

テレビが大津波を伝えたのはその直後だった。

沢山の家が流されていく。

基礎につながれていたはずの家々が基礎と別れ、水に浮かび、まるで模型の家が流されているような錯覚を覚える。

「ありえない」

そうつぶやいた彼はテレビを食い入るように見続けた。

「この家々の住人は逃げられたのだろうか。いやその間がないだろう。とすればこの流れている家にまだ多くの人がいる」

まさに地獄絵であり、目を疑う光景がテレビ画面に続いた。

次第に東北地方の津波の被害が地震そのものよりも大きいことが分かってきた。万を超える行方不明者が報じられた。

福島原発も津波に襲われが、放射能漏れの危険が迫ったのは、津波が起きてからそれほど日が経たなかった。

一瞬にして東北地方は壊滅的被害を受け、多くの死者を出した。

津波で家を失い、放射能から逃れる避難者の数は膨大となり、早急にこの方たちの仮設住宅が必要となった。

しかしライフラインは切断され、食料や医療も届かない場所にどうやったら仮設住宅が建てられるのか。

次第に仮設住宅が間に合わない報道が増え始め、国民は批判の目を政府に向けた。

大地震から40日経ったある日、東山は冬が来る前に仮設住宅1万戸を建設できる方法を国に提案をする大胆な行動に出た。

それは自ら開発した可動建築「命の家」を中国で生産し、海と空から現地に設置するというものだった。

「このご提案は、有史以来の国難を一日も早く克服するため、隣国・中国のコンテナ生産力を借り、月産2000戸、年内1万戸の「コンテナ式仮設住宅」を建設する、というものです。

2011年（平成23年）3月11日、マグニチュード9.0の大地震により発生した東北地方の大津波は、死者・行方不明者2万7979人、避難者17万2415人、建物全壊・流失1万9019戸（いずれも3月31日現在）という未曾有の大災害をもたらしました。復興には再び津波災禍を受けない都市計画と道路やインフラ、建物の整備が不可欠ですが、それにはまだ相当の年月を要します。

このたびの災害は地震、大津波、原発事故が重なった複合災害のため、仮設住宅と仮設施設の需要は6万戸以上と言われておりますが、被災者の命を守る仮設はいくら

あつても足りない状況ではないでしょうか。ご提案する仮設建物システムは、コンテナの製造ラインを使い、中国において日産80戸の建築用コンテナを生産するものです。この方式を採用すれば、厳寒の冬までに約1万户を被災地に設置できます。」

しかしこの提案に国も県も応じることはなかった。

四 HAL

設計作業は翌日、ホテルにて早くも始まった。

東山が東京から持ってきたもの、といえばパソコン一台である。

しかしそれには建築家ロボットHALが搭載されている。

HALの役目は、依頼者の根間と役所の間に入り、1日も早く解決策をまとめることに尽きる。

彼は常日頃、建築とは交渉ごとの結果であり、デザインが優先される時代は終わった、と考えてきた。

都市とは建築を必要とする要因と、建築を必要としない要因のせめぎ合いの場である。

日照権問題が騒がれた頃、彼は都市の矛盾に気付いた。

日照を奪われたものが、明日は奪う側になる。

建築家などという職能は罪深い。

しかし都市は必要であり、誰かが造らなければならぬ。

人間の欲望と理性の間に入り、折り合いをつけて、少しでも摩擦をなくす。

そのプロセスの中にこそ計画がありデザインがある。

コンピューターを活用するのはその為であり、線や図を描くことは二の次なのである。

若い頃、東山はコーポラティブハウス運動を起こした。

建物のデザインは個々の建築家に任せ、彼は参加者間の権利調整を行うコーディネーターと言う役を作り、自らその任に徹した。

まだパソコンがない時代である。

大型コンピューターを電話回線で繋ぎ、シェアして使う。

プログラムも自分で作り、会場に持ち込んでその場で参加者の要望を聞き入れ、円満に調整した。

翌日の新聞に、電算機造りマンションなどと報じられたこともあった。

今ならパソコン一台あれば難なくできることだが、東山にはこうした経験が建築家には必要と強く感じている。

今回の可動建築は規模も小さく、用途も限られているので建物の権利調整とまでは言わないが、都市レベルでは正しく高度な調整が必要なのである。

東山はその観点から使うべきものとして自ら開発したH A Lを選んだ。

H A Lは空間を構成する様々なパターン図形を画面に配置するだけで、即座に立体パース図が描ける東山お気に入りソフトなのである。

このビジュアルな即時性こそが当事者のコミュニケーションを早め、相互理解を深める効果があると考えていた。

無論、H A Lだけで問題がスピーディに解決するものでもない。

まず必要な調整の当事者を見ると、クライアント、テナントが建主側、法と環境を護る側に都市計画課、建築指導課、その背後に住民がいる。

東山は当事者全てが納得できる計画案を矢継ぎ早に示さなければならぬ。

しかしながら同じテーブルの上で議論することはないのだから、二三か月どころか半年、いや1年が経ってしまうこともあり得るのだ。

果たしてクライアント側はそれに耐えられるだろうか。

東山の危惧が忽ち現実となり、交渉ごとを最初から妨げた。

それはクライアントとテナントの意見の不一致だった。

もともとテナントの増築の動きが地元住民の目にとまり、役所が動いた経緯がある。テナントは焼き鳥店で、地元民はその臭いを警戒している。

できたらテナント工事をやめてもらいたい、と暗に期待する。

一方テナントは既得権があり、住民に遠慮する事はない、と一歩も引かない。役所も合法であれば民間事業にとやかく言えない。

できればクライアントに善処を期待することぐらいしかできないのである。

東山も間に入って意見を聞き試案を示すが、根本がはつきりしない限り一向に前に進まない。

こんなやり取りが続き、忽ちひと月が過ぎた。

ようやく焼き鳥店増築の方針が両者の間で決まり、琉球赤瓦を屋根全面に配した設計案がまとまると、都市計画課との折衝が開始された。

ところが赤瓦の屋根の助成金に新たな問題が生じた。

そもそも可動建築であるから、クライアントは地主との間で借地契約をしている。借地である限り数年後に撤去する可能性すらある建築物である。

当初役所側は手続きを経て一様に助成できると考えていたようだが、テナポラリーな建築物は想定していなかった。

結果、助成できないとの判断に変わった。

そうなると建築主側が全額負担しなければならず、それではあまりに酷である。

東山は赤瓦に代わる環境条例適合の方策がないか、担当者と協議に入った。

役所側も特殊事情を考慮し、妥協点を見いだす努力を惜しまなかった。

こうして確認申請が下りるまでに半年余を費やした。

東山が沖縄と羽田を行き来した回数も、当初予定を遥かに超えることになったのである。

五 天空都市

およそ一軒の住宅にも満たない可動建築の設置替えと増築工事が、消防や役所による規制のもとに開始された。

まず違法状態になっている可動建築をクレーンで吊り上げ、向きを90度回転し、コンクリートの基礎に設置する。

中では営業をしたままであるから可動建築ならでの荒療治である。

僅か数時間で合法の状態となった。

固定建築ならこうはうまくいくまい。

場合によっては移動時に壊さざるを得ないだろう。

東山は、今ここで起きている現実こそが可動建築に求められているニーズそのものではないか、と強く思いながら工事を指揮していた。

もともと彼の可動建築は道路上を輸送できる規格でできているから、もしも他の場所に移動しても即日使用開始できる。

この機動性を災害復興に活かしたら、被災地の早期救済にどれだけ貢献できるか。問題は可動建築といえども災害が起きてから作り始めては間に合わないことにある。

ここにいざという時に役立てられるもう一つの都市の必要性が生まれると東山は考えた。

これが彼の提唱する天空都市と呼ぶ構想である。

天空都市とは、実在する都市を表の都市とすれば、影のように切って切れない裏の都市である。

全ての物には影がある。

物が動けば影も動く。

しかし普段、誰も影を意識しない。

影を落とすのは光であり、光がなければこの世は闇である。

光は必要であるが、時に危険でもある。

もともと都市というものは自然発生的に生まれ、自然の力や戦争、つまり光によって破壊されてきた。

都市計画という学問は近年になって生まれたが、光の恩恵ばかりを意識した学問である。

光が都市に集まる人間のエネルギーをはるかに超えた存在であることを考えたことは
ない。

大津波による村落の破壊や原発事故を目の当たりにした我々人間は、光に対して絶
対的などは存在しないことを思い知らされた。

しかし人間は喉元過ぎれば忘れる。

日頃影を忘れているのと同じである。

人が創造したものは、人や自然がもたらす光によって破壊されないものは何一つな
い。

□なども例外ではないのだ。

想定外という言葉が流行ったが、人間のなすことなんて常に想定外が起こる。専門家などはその程度のものさ。東山は建築や都市の罪深さを今更のように思い、自虐の念に駆られるのだった。

六 事務所開設

沖縄の出張を繰り返すうちに、東山の心にある変化が生じ始めていた。

沖縄に建築事務所を開こうと思ったのである。

理由は、開発した可動建築の普及に自ら乗り出す必要性があると感じたからである。開発を始めて以来既に7年経つが、千葉と沖縄に数件の実績があるのみで、なかなか後が続かない。

2013年3月に東日本大震災が起こり、仮設住宅として役立つ筈であったが、既成プレハブの権益壁を破れず、資金難もあって成果を見なかった。

那覇は東町にワンルームを借り、事務所を設けたのは、その年の6月の事であった。

長引いていた梅雨もようやく明け、真夏の太陽が、白い沖繩の家々や街路を一層熱くさせていた。

東町は市役所に近く、歩いて10分ほどの距離ではあるが、さすがに日中歩く人は少ない。

若い中国人らしい観光客が数人、荷物を引いて車道を渡ってきた。

歩道の段差に車輪を取られて、一人が大声をあげた。

それを見ているかのように猫が1匹。

歩道の、それも真ん中あたりに、正座している。

彼らが近くに寄っても動こうとはしない。

一人が猫に手を出すと、静かにすり寄って行った。

近くの飼い猫なのだろう。

沖繩には猫が多いと、訪れるたびに気付く。

野良猫も多いが、餌をあげる人も多い。

それをとやかく言う声もあるが、止めさせようとはしないようだ。

事務所に寝起きするようになると、ホテル住まいとはまた違う沖繩を発見できるようになった。

東山が東町に事務所を開いて半年が過ぎた。

首里当蔵の根間の事務所問題が解決してからは、根間の出身地である宮古島で、根間が取り扱う土地に、様々な可動建築を計画するプロジェクトに着手した。

沖縄県の住宅は、古くは木造だったが、現在ではコンクリート造が大半を占めている。

それが人手不足と材料費の高騰で、庶民がコンクリート住宅を建てるのが次第に困難になってきている。

沖縄本島はまだしも、宮古島のような離島となると、この様相は最悪を極め、庶民住宅の建築は絶望に近い。

離島の建築問題の解決には、自らが開発してきた可動建築しかない。

それも離島で建設するのでなく、本島で生産し、海上を輸送して現地に設置する大胆な発想の転換が必要である、と彼は考えている。

そこで根間の理解と協力を得て、中城の南上原に可動建築の組み立てヤードを作った。

まず中国で生産依頼し輸入した可動建築の鉄骨ユニット6台を組み立てた。

一台はヤードで使用するが、残り5台は宮古島の住宅建築に使用する。

東山の考えは、住宅に必要な設備を1台にまとめ、他の2台に居住スペースを作る。

居住スペースは家族構成や用途によって1台から数台まで、台数を変えれば良い。最小限住宅は2台ということになる。

この方法を採用すれば、災害仮設住宅も迅速に対応できる。

問題は出来上がったユニットのストックだけだ。

設備ユニットと居住ユニットでは、設備ユニットの方が製造に期間がかかるから、こちらを優先してストックする必要がある。

また鉄だから風雨にさらせば錆びるから、屋根のある倉庫が必要だ。

海上輸送の問題は船の大きさにもよるから、どこでも設置できるとは限らない。

まだまだクリアしなければならぬ障害も多いのは確かだ。

それでも可動建築の有用性を損なう理由にはならないと、東山は考えるようになった。

六 面影

首里の可動建築工事が一段落し、単身赴任生活にも慣れて来たのか、東山はたまに夜ぐらい自分だけの時間を持ちたいと思い始めた。

《そうだ。あの女性が経営している店に行ってみよう》
東山は名刺に書かれた住所を頼りに、ウエブでおよその場所を掴むと事務所を出た。
松山とあるがこの辺りは新宿歌舞伎町のように飲み屋も多く、ネオン看板をさがし
て歩く他ない。

行きつけの兄弟寿司を通り過ぎると左に回り、一筋裏手の通りに入った。
程なく雅のネオン看板が目に入った。

《あのビルか…》

階を確認してエレベーターに乗る。

東山はあの時の婦人の顔を思い浮かべた。

《驚くだろなあ〜》

エレベーターの扉が開く。正面に雅とあった。

《ここか》

見るとシャッターが閉まっている。

貼り紙がある。

【暫くお休みさせていただきます。店主敬白】

東山は目を疑った。

《暫くということとは、何かあったということか》

ポケットから名刺を取り出すとその場で電話をしてみた。呼び出し音はするが繋がる気配はない。

名刺をよく見ると小さくメールアドレスが書かれている。

東山は持っているiPadを開くとメールを書き始めた。

「拝啓、東山と申します。突然メールを差し上げ失礼します。実は頂いたお名刺を頼りに、お店に参りましたところ、お休みの貼り紙があり、お電話をしたのですが通じないため、メールをいたしました。いつオープンされるのか。このメールにご返信頂けると幸いです」

メールをその場で送った。

暫く待つが、どうやら届いたらしい。

あとは返信を待つしかない。

東山は階下に下りると、来た道を引き返し、行きつけの兄弟寿司に立ち寄った。

「お帰りなさい！」

板前の武さんの元気な声が彼を向かえる。

兄弟寿司は那覇でも老舗の江戸前寿司屋である。

武さんは30年以上もこのすし屋に勤めている板前で、東山とも旧知の仲である。東山が沖繩に来ると必ず一度は立ち寄ることになっている。

いつも東山の顔を見るなり、「お帰りなさい」といつてくれるのが彼にはうれしく聞こえる。

何日も続けて通った日もあり、東山はいつしか「武食堂」と呼ぶようになった。

いつものようにカウンターに座る。

武さんは、東山の落ち着かない様子に「どうかしました？」と聞いた。

「いや、どうもしない」と言いながらも、カウンターに置いたiPadが気になって仕方がない。

メールを何回か開いた。

すると待っていたメールが届いた。

彼は食い入るように読んだ。

「東山さま、メールをいただきありがとうございます。実は、姉は先月急な病でこの世を去りました。私は妹です。姉を訪ねてお越しいただいたのに、申し訳ございま

せん。お店は1年、お休みさせていただきます。姉の意志を継いで再びオープンいたします折には、改めてメールにてご案内させていただきます…」

読み終えると東山は目を閉じ、天を仰いだ。

《なんとということだ。あの人亡くなつたなんて》

武さんがまた聞いた。

「どうかしました？」

東山は我に返つたが、しばらく言葉が出ない。

「いや、なんでもない」

気を取り直し、返信のメールをかきはじめた。

「早々にご返事いただき恐縮です。拝見し俄かに信じ難く言葉もありません。心よりお姉さまのご冥福をお祈り申し上げます。小生、お姉さまとは羽田からの機内で初めてお逢いし、お名刺をいただきました。お店へとお誘いを受けたのですが、単身赴任の慌ただしさに、今日までお伺いできずにおりました。このような事になるなら、もつと早くに、と悔やまれてなりません。たまたま隣り合わせの席で、窓から綺麗な富士山を眺め合つた事が昨日のようです」

彼はふと、あの日あの時に撮つた写真がiPadの中にある事を思い出した。

「このメールには、あの日小生が窓から撮りました富士山の写真を添付いたしました。お花の代わりに、墓前に手向けて頂ければ幸いです…」
彼は一息いれると書き上げたメールを送信した。
その日再びメールが返ってくることはなかった。

七 朝の散歩

東山が健康のためにと始めた早朝の散歩は、沖繩を知る上で貴重な時間になり始めた。

日常生活で習慣化した散歩もいいが、非日常生活のそれはまた多くの発見をもたらしてくれるようだ。

事務所を出て天妃小学校の脇を通り過ぎ、右手に上山中学校の校庭を見る辺りは、沿道に樹木が多く、小鳥たちのさえずりが聞こえ、彼の好きな道の一つだ。

樹木から落ちる枯葉や木の実を、女学生たちがお喋りしながら箒で丁寧に掃き集めている。

道行く東山に、おはようございます、と声を掛けてくれる。

東山もおはようと返す。

平和だなあとと思う。それにしてもあれから70年の歳月が流れ、よくここまで回復したものだ、といつもながら感心する。

1944年10月10日の大空襲で那覇市は焼土と化した。

よく目にする当時の写真には、唯一コンクリート建物だった学校の校舎だけが焼け落ちずに残る。

その校舎が建て替えられ、元の場所に建って、今東山の目前にある。戦争の悲惨さを今更ながら感じざるを得ない。

これも単なる旅行者には分かりようのない史実なのだ。

東山は散歩していると、沖縄の樹木には霊が宿っているとさえ感じることもある。中でも地上にまで根がのたうち、暑い太陽を密集した葉で遮断するガジュマルという木には、その気配が濃い。

他にもホウオウボク、アカギ、フクギと言った沖縄独特の樹木があり、これらが風景を作っているのだが、根元から幹にかけてまっすぐに伸びる木はフクギぐらいで、他にはまっすぐ無い。

樹木が育つ間に、強い台風には何度も枝を払われ、根は捻じ曲げられながら生き延びてきたのだろう。

霊を感じるのは、沖繩の人々の生き様と何処か重なるためかも知れない。

反面、沖繩の人々は樹木のありがたさを忘れていくようにも思える。

なぜなら防風林として昔の家々に必ず植えたとされるフクギを見ることは少ないし、アカギにしても旅人たちには区別がつかない。

いや、沖繩の若者たちでさえ、その名を知らない。

市はもつと樹名札をつけておくべきではないかと、東山は思うことが多い。

八 死者からのメール

ある日曜日の朝、東山のパソコンに見覚えのあるタイトルのメールが届いた。それは確かに彼が送ったメールの返信である。

冒頭に「東山様へ」とある。あの亡くなった夫人に宛てたメールの返書であった。

「拝啓 東山様へ

その節は美しい富士山のお写真とともにご丁寧なメールを頂き、誠にありがとうございました。すぐにご返事を差し上げるべきところ、今日まで失礼をいたしました。お許しください。頂戴したメールと富士山のお写真とを、姉の墓前にお供えさせていただきます。姉もさぞかし喜んでいらっしゃるでしょう。姉は生前、富士山と鶴が大好きでした。どちらも日本の凜として、姉の生き方も今思うと通うところがありました。東山様、厚かましいお願いですが、また富士山のお写真をお撮りになりましたら、ぜひ亡き姉に見せてあげてください。よろしく願います。お店の再開は、姉の一周忌が過ぎますまで控えさせていただきます。その時が参りましたらご案内させていただきます。お目にかかれます日を心待ちにしております。ではお身体に気を付けてお過ごしください。かしこー

東山は胸に熱いものを感じていた。

墓前に捧げるなどとは思いつかなかったからである。

《なるほどなあ。こんな供養の仕方もあったんだ》

東山はしばらく想いを巡らした。

それにしてもこの姉妹はなぜこんなにも強い絆を感じさせるのか。

自分の身に死が迫っていたことも知らず、遠い身内の病氣見舞いに身を削っていた姉。

死んだ姉がまだ生きているように心配りする妹。

これまで彼の身の周りで、こんな姉妹愛を見たことがあるか。

沖繩というところには都会の人間が失ってしまった人間愛が、脈々と生きているに
ちがいない。

東山は返信メールを書いた。

「妹さまへ、

心温まるメールをいただき、なんとご返事して良いのか戸惑いました。お姉さまの
供養の為と仰る妹さまのお願い、確かに承りました。天空の富士の良い写真が撮れま
したら、必ずお送りいたします。お姉さまにご覧いただきますよう、墓前に捧げて頂
ければ幸いです。お店の再開、心待ちにしています。東山」

東山はメールを送ると、武食堂へと出かけた。

九 JAL905便 2014/12/24 8:30羽田発

年の瀬が迫ったこの日、今年最後の沖繩行きを決め、羽田へと向かった。

修学旅行の学生さんも、この時期さすがに影もなく、空港は閑散としている。

あと数日すれば年末年始の混雑に巻き込まれよう。

街中はクリスマススイブで騒々しいが、年々それにも関心が薄れてきた。

しばしの静寂こそが良きプレゼントになつてしまったようだ。

さて、今朝はどんな富士に逢えるのだろうか。

沖繩行きも乗客は少ないので、好きな席が選べる。

翼に邪魔されない最前部か最後部がいい。

この日はなぜか最後部の窓側50のFを選んだ。

空は晴れているが、低い雲が所どころにある。

富士にかかつてなければいいのが。

上昇する機がいつものように右に旋回すると、眼下に横浜港が見えてきた。

三浦半島を横断する直前になると綿雲が現れた。

この先が心配である。

目を凝らして雲を見る。

すると珍しいことに眼下の雲の上に丸い虹がかかり、しかもその真ん中に、黒く機影が映っている。

富士にはまだ間があるが、夢中でiPadを向け写真を撮った。

虹と機影はどんと先に行き、やがて機影は消え、虹だけが大きく輪を広げてきた。

突然綿雲が途絶え、虹が半分に欠けると、その先に白雪の富士が現れた。

なんと美しい天空のシヨウだろうか。

間もなく虹雲は消え、富士ばかりとなった。

写真家の気持ちが一瞬わかるような気がした。

撮りたくても撮れるとは限らない瞬間を待つて、貴重な光景を写真に収められた時の喜びはきつとこんな風なんだろうな。

一人iPadで繰り返し眺めていると、キャビンアテンダントが通りがかりに声をかけて来られた。

「良い写真が撮れましたか？」

「ハイ、珍しいものが撮れました。富士山と虹です。ご覧になりますか？」

「ぜひ見せてください」

彼女は身をかがめてiPadを覗き見た。

「え、これ、虹と飛行機なんですね。カメラの傷かと思いました。こんなことあるのですね。しかも富士山と一緒に写っているなんて、初めてですわ」

「よろしければ差し上げましょうか。メールをお教えいただければお送りします」
「ありがとうございます。良いものを見せていただきました。どうぞ良いご旅行を」
そう言って彼女は戻って行った。

その後メールを教えて来るのでもなく、ことはこれで終わりと思われた。
飛行機が那覇に近づき、そろそろベルト着用のアナウンスがある。

その直前、キャビンアテンダントが小さなキャンデイの袋を手渡して言った。

「先ほどありがとうございます。これ、キャンデイですけど、よろしかったらどうぞ」

「ありがとうございます。頂きます」

機は滑るように着陸すると、駐機場に向かう。

乗客はまばらだから、降り支度を済ますと、彼女に挨拶の視線を送った。

彼女も笑顔を返してくれた。

ちよつとした気遣いが旅に思い出を添えてくれる。

事務所に着くとポケットからキャンデイの袋を取り出し眺めていた。

彼はあまり甘いものを口にしない。

《壽司屋の娘・優にでもあげようか》

それにしても袋を開けないのでは、下さった彼女に失礼に思われた。袋のチャックを開く。

JALの広告だろう、飛行機が印刷された名刺大の紙が出てきた。

思わず裏返すと、彼女が機内で書いたと思われるメッセージがあった。

そこには写真を見ての感動と、感謝の気持ちを素直に、小さな文字ながら丁寧に綴られていた。

メールはないが、最後にメリークリスマスの文字が英語で書いてある。

旅先でのクリスマスイブを気遣ってくれたのか、彼女のサービス精神に嬉しくなった。

すぐにJALのお客様サポートセンターに電話し、事情を話し、写真を彼女に転送してくれるようメールで依頼した。

翌日、センターからは礼状メールが届くとともに、この話を国内線の全てのキャビンアテンダントに伝えたいと書かれていた。

天空のメリークリスマスは、旅人の心に暖かなロウソクの火を灯してくれたのだ。た。

その日の富士は、自分が朝、期待した通りとは限らない。

天気は刻々と変わるのだから、当たり前なことなのだが、それが分かったのは随分と回を重ねて乗ってからのことである。

天空の富士に逢いたければ、予断を持たずに乗るのが良い。

すればまた新たな発見があるだろうからである。

この日の富士もまたそんな楽しみ方を教えてくれた。

いつものように窓側の席を得た。

ただいつもと違うのは出発が1時間ほど早く、いつもと違う富士に逢える淡い期待があった。

午前中に那覇に着けばいいのだから、いつものように8:55の便でよかった。

たまたま乗れないのを覚悟のローカルバスと高速バスの運転手が、気を利かせてバスを停めてくれた。

二回も幸運があったのだから、ヒョとすると一便早く乗れるかもしれない。

慣れきった旅には、こんなつまらないことも嬉しくなるものだ。

さてJALのカウンターに来てみると、いつもの便はほぼ満席で、窓側の席に空きはない。

逆に一便早い7:55には希望する席があるという。

そんな訳だから、この先幸運があるかもしれない。

いや、キットあるぞ、と急ぎ搭乗口へと向かった。

出がけには雲一つ無く、澄みきっていた空気は、すでに霞がかかっているように見える。

飛び立つのがいつも待ち遠しく感じる。

機首が上がると機体は一気に東京湾へ。

眼下に海ホタルを見ると、大きく旋回して機は富士を目指した。

しばし視界から消えた富士が、再び眼前に現れるまでの時間は短い。

手に持つiPadの準備をして窓に向け構える。

薄雲が何回となく眼下を流れて行く。

《雲が無いといいが…》

芦ノ湖が雲間に見えてきた。

もうすぐ富士だ。

雪の裾野に続いて、頂が眼に飛び込んできた。
幸い薄雲もない。

機はまだ上昇を続けているが、早々と機長があいさつし、富士山が右手に見える
乗客に知らせている。

しばらく目で見て楽しむと、シャッターを切り続けた。

さてさて1時間早い違いを探さなければならぬ。

富士の山肌に特に変化は見られない。

そうか、影だ！

しかし日の当たる静岡側に影は落ちない。

機がもう少し山梨県側に回れば、富士の影が出るはずだが。

その影の先端、つまり山頂の影がかかる場所で、今朝もダイヤモンド富士が見えて
いることになる。

天空の富士の素晴らしさは、地上の人間の営みをも想像することができるスケール
の大きさにある。

機が進むにつれ、想像通りの影が見え始めた。

しつかり富士とその影を写真に撮って、山頂の影の落ち場所を見た。

その瞬間、厚い雲が視界を遮った。
幸運だった。

東山は那覇空港に着くと、今は彼がそう呼ぶ霊夫人のメールアドレスに、機内で撮ったばかりの富士の写真を送った。

「霊夫人様へ」

今日は思いがけない富士山の影を撮ることができました。その影の先端では、今日もダイヤモンド富士を見ている方いることでしょう。自然のダイナミックな営みを想像させる写真になりました。天空の富士・今日の一枚をお送り致します。東山」

送ったメールへの返信はないが、届いているのは間違いない。

多分妹が読み、写真を姉の墓前に捧げてくれるだろう。

一昔前には考えられない死者への供養だ。
東山は自分が生きた時代の変化があまりに早いことに、ハッと気づいて我に帰った。

夜の帳が下りたままの早朝、那覇東町の事務所を足早に出た。いつもの荷物をガラガラと引き、モノレールの旭橋駅へと歩く。

すでに初電は行ってしまったが、JALの一番には充分間に合う時刻だ。

眩いヘッドライトのタクシーが、客と間違えて寄ってくる。

ゆいレールという名のモノレールは、荷物を持った旅行者で満席だ。

誰もが非日常から、それぞれの日常へと帰って行くのだろう。

機内の窓からは、明けたばかりの朝陽に、サンゴ礁の小島が輝いている。

海の遠く向こうには、国立公園に指定された慶良間諸島が、薄っすらと浮かぶ。

流水の様な雲海の上に出ると、機は一路羽田へと北上する。

昨夜いつもの店を、いつもより早めに失礼したのも、今朝が早いからだ。

ママが階下まで見送ってくれたが、こうして行き来を繰り返していると、日常と非日常が入れ替わった錯覚に陥る。

外国で暮らした若い頃のことだが、よく町の風景をスケッチしたものだ。

最初の頃は見なれない景色に心が躍り、鉛筆も走った。

ところが数ヶ月すると、自分がその風景の中にいる事に気づく。

風景とはそういうものだから、目が新鮮な内に描いておく必要がある、と気付いたものだった。

今、こうして機上に居ると、非日常を日常にして仕舞わない努力がある、とつくづく思う。

もうすぐ富士に逢えるのだが、いつも同じ富士ではない。

逢うまでの心境はもちろんのこと、逢う瞬間の出来事も違う。

それを日常としてしまったら、旅は旅でなくなってしまう。

行きつけのいつもの店も然り。

ママや女性たちとの会話、出される郷土料理にまつわる興味深い話、居合わせた客との四方山話。

非日常だからこそ人生に喜びをもたらすのではないだろうか。

至福の時間が刻々と過ぎようとしている。

機は未だ海上にあるが、遠くに駿河湾が見えてきた。

よく見ると小窓の右端に富士が、上半身を雲上に出している。手前の雲が高くしかも厚そうだ。

このまま近づけば、間違ひなく雲に隠れるだろう。

霊夫人は湯浴みの最中と見た。

泡の雲に身を隠そうとしている。

今のうちに恥ずかしそうな霊夫人をじっくりと拝見しておきたいものである。

機は降下を続け、雲海に突入した。

しばらく真白な視界が続き、突然雲が切れると、霊夫人が現れた。

既に礼装をして。

羽田は晴れているが、あの雲が上空を覆う。

滑走路には雨水が光っている。

十一 JAL907便 2015/1/27 8:55羽田発

「霊夫人様へ

昨夜来の雨が、今朝になってもあがつていません。こんな日はハナから貴女に逢えないと諦めています。天気予報は午後には晴れる、といっています。それまで待つわけにもいきません。楽しみにしていたデートがドタキャンにあった気分ですが、そ

れもたまにはいいものです。何か他のサブライズを期待してみることにいたしました。8:55に乗ります。50xに空席がありました。ラッキーです。席に座ると窓から薄日が差してきました。雲が薄くなっています。問題は雲の厚さですが、西から天候が回復することを考えれば、期待できるかもしれませぬ。機は定刻にスポットを離れ、滑走路に向かい始めました。外は春の陽気のように、霞がかかっています。ラッシュアワーの羽田は、離陸に向う機体が列をなして進んで行きます。おや、青空が所どころに見え始めました。いや、まだまだのようです。間もなく離陸です。機はターンして止まり、エンジンをつかしました。手が震えて入力ができませぬ。さあ、一気に雲上へ。貴女をさがしています。見えました。眼下の雲に、丸い虹が現れました。その真ん中に機影があります。あの珍しい景色にまた出逢えました。横浜港が見えませぬ。雲がここで消えました。相模湾の上空、江ノ島が見えてきました。全体が春霞のように白いです。貴女もまたぼんやりとしています。雪の白さがまさってクツキリ見えます。積雪はこの冬最も多く、宝永山の岩肌も雪で覆われています。裾野の樹林帯も薄く雪化粧したようで、雪のない下界とはつきり区別できます。いつもながら思うのですが、もし貴女が日本になかったら、歴史は変わっていたかもしれませぬ。どんな風に、とは言えませぬが、少なくとも日本人の審美眼は影響されたでしょう。物が美しいのではなく、美しいと感じる心が美しいと、どこかでそう読んだ気がします。

が、その通りだと思えます。しかし物が存在しなければ、感じる心は養われません。天空から貴女を目の当たりにすると、心の持ちようが変わってしまうほどの力を感じます。人生の些細なことはどうでもよくなってきました。勿論誰もがそう感じるのではないでしょうが。仕事のことでも恐縮ですが最近、建築や都市とは何なのか、自問しますが答えが見つかからないでいます。人間が築いたものが、人間を傷つけ、命を奪うのです。建築や都市がなければ戦争も憎しみも生まれません。建築や都市を建築家が設計すれば美しものと思うこと自体、人間の勝手な妄想であり錯覚ではないでしょうか。まるで宇宙基地か宇宙船のようなデザインの新しい国立競技場の設計が話題になっていますが、建築家と為政者の戯れに見えてなりません。建築家などという職業は為政者の言いなりなのでしょう。それとも人類に必要な天職なのでしょう。大地の戯れである貴女を見ていると圧倒的な美しさを感じます。霊夫人は凜とした貴女が好きと言っておられた。自分も凜とした生き方をしたいとも。せめて建築や都市は人間に寄り添う物であってほしいです。それが最も美しい筈であろうから。東山より

昨夜の根間夫妻との酒席が適度に酔わせてくれたのか、今朝は寢床を離れるのに時間がかかった。

東京に戻る日なのに、準備が捗らない。

荷物をまとめて部屋を出たのは、いつもより2時間も遅れてのことだった。酒が多少残っているのかもしれない。

旭橋の駅は相変わらず旅行者が多く、自分もその一人らしく列に加わる。どんよりとした雲が那覇市内を覆っている。

冬の季節の沖縄はスツキリしない。

二週間にわたったコンテナの輸入と組み立て作業。

想定外のトラブルが続いたが、なんとかやり遂げたのにあまり満足感がない。

きつとこの天気のせいだろうと東山は思った。

JAL602便が東京の日常へと那覇空港を飛びたつたのは、定刻より遅れてのことだった。

東京の天気は、心配された雪ではなさそうだ。

きつと美しい富士に逢えるだろう。

東山は初めて機上で霊夫人に出会った日のことを思い出していた。

彼女の生き方は、鶴の恩返しのようにだと思ふ。

自分の身を削ってまでも身内や客に尽くす。

気付けば自分だけの幸せを見失ったのか。

病の叔母の老い先を口にしていたが、自分も不安を感じていたに違いない。店を止めれば一緒に働いている妹たちも生活に困るのだろう。

沖縄でも消えつつある家族思いの精神を、この人は健気にも守ろうとしていた。

そんな彼女だから自分が病に冒されているのを周囲に知らさなかつたのか。

彼女が生きていたら、沖縄や琉球の習慣や言葉の由来を教えて貰えたかもしれない。

大和育ちの東山には新鮮に聞こえ、時間が経つのを忘れさせてくれたろう。

この人も日常と非日常の空間を懸命に行き来していたように彼には思えた。

キャビンアテンダントが注文したコーヒーを持ってきてくれた。

ミルクを入れるといつも思うことが彼にはあつた。

《手を汚さないミルク入れがあるといいのになあ》

窓を見ると雲海が広がっている。

ところどころに切れ目があるが、下界がみえるほどではない。

東山の眼は、若い頃からのコンピュータの見過ぎで、すでに左半分が見えていない。

医者にも治らないと言われ、このまま死ぬまで不自由する覚悟をしている。

飛びたつて1時間ほどになるが、雲は相変わらず遠方まで続く。

それでも多少薄くなったろうか、機がまだ海上にあるのがわかる。

翼の先に並走する白い機影が見えた。

次第に近づき大きくなり、瞬く間に本機の上空に消えていった。

機内のモニターに伊豆大島が映り始めた。

《もう見えるはずだが》

まだ見えない。

雲海に邪魔されたか。

諦めかけたその時、眼下に大島の三原山が、雪をいただいてみえた。

目をあげると雲上に凍えて霊夫人が立っている。

《今日も逢えたね》

東山はそう心の中でつぶやいた。

建国記念日の今日、関東平野は晴れ渡り、底冷えする朝を迎えた。空気が澄んで、何もかも輝いて見える。

こんな日は、霊夫人の雪化粧もきつと眩いに違いない。

東山は期待を胸に家を出た。

休日はバスのアクセスも悪いから、早い便に乗るのは難しい。

羽田に着くとカウンターへ急いだ。

「富士の見える50㍻あたりをお願いします」

「後方はいにく修学旅行の学生さんで満席です。前方の19㍻はいかがですか」

「それはありがたい」

「写真をお撮りになるのですか…」

「ええ、冬の富士は綺麗ですから」

東山は二言三言会話を交わし、搭乗口に向かった。

機内からは工場から真っ直ぐ立ち上る煙が見える。

外は無風ようだ。

こんな日は霞がかかってしまう。

低い霞ならいいが、嶺より高いと最悪だ。

離陸すると修学旅行の学生さんたちが黄色い声をあげた。

飛行機に乗るのが初めての子も多いだろうな。

ふと子供の頃のことを東山の脳裏をよぎった。

《俺も臆病な子供だった》

一昨日、荻窪の母を見舞った時のことを思い返した。

98歳と高齢だが、妹の世話になりながら、これまで元気に暮らしていた。

ところが年末に家の中で転び、以来足が急速に衰え、歩けなくなった。

張りのあつた声も、か細く震え声になった。

長男の東山が沖繩から帰って来るのを待っていたかのように、母親は息子に、絞るような声で言った。

「お墓のことだけど……あなたは東京に住む気はないようだから、私が死んだら妹に継がそうと思うのだけど、どう？」

彼は親不孝を続けてきたことを、母の言葉に聞いていた。

返す言葉もない。

思えば親孝行の一つもできていない。

男の意地を通すことだけに生きて来た。

今更孝行息子になれやしない。

手土産の寿司を、細くやつれ振るえる手でつまんで食べた母。

Pradに涙が落ちた。

今朝の霊夫人は、見送る母のように思う。

霞が高く少し淡い色だ。

《もう少し、頑張って居てくれ》

東山は祈るように霊夫人を見遣った。

十五 沖縄戦

那覇空港に着くと沖縄国際平和研究所の桑高氏から、東山が依頼してあった本が届いた、とのメールがあった。

午後にも取りに伺いますと返信メールを送り、事務所に荷物を置いて、研究所へと向かった。

研究所は事務所から歩いていける距離、ロワジュールホテルにほど近く、交差点傍の小さなビルにある。

1階と2階には、沖縄戦の写真をはじめ広島原爆、ユダヤ人迫害のホロコーストなど、先の大戦の記録写真が所狭しと展示されている。

入館料を払えば誰でも入場でき、貴重な体験ができる。

桑高氏はその管理者であり、展示の案内役を務めておる方で、内地からの移住者と以前訪問した時に聞いた。

東山が沖縄に通うようになって、次第に琉球のことをより深く知りたい、と思うようになった理由は、魂の抜けたような建築物の多さにある。

戦後の沖縄は建築を考える余裕すらなかったのだろう。

その最たる原因が沖縄戦にあるのではないだろうか。

東山はそう思うようになっていた。

「お生まれは確か浜松でしたね？」

桑高氏は同じ静岡県の出身と思っていたらしく、東山に尋ねた。

「いえ、生まれは東京です。浜松は疎開先でして、3歳の時に終戦を浜松で迎えました。ですから僅かですが、戦争の記憶が残っています」

「どんな記憶ですか？」

「米軍の艦砲射撃です。街が一夜で焼け野原になった光景は忘れられません」

「艦砲射撃ですか？空爆ではない？」

「はい、確かに艦砲射撃と記憶しています。当時3歳ですから、大人の言葉を耳にして記憶してきたのでしょう」

「当時、米軍は沖繩戦の真つ只中でしたから、浜松の沖合に艦船が行くことはないように思いますが」

「浜松には日本軍の空軍基地があったようですから。でも戦後70年、そろそろ一度検証してみたいですね」

「展示、ご覧になりますか？」

「いや、また今度にします。本、買って帰ります」

そう言い残して東山は研究所を後にし、旭橋からバスで糸満へと向かった。

事務所に帰ると、先ほどの桑高氏からメールが届いていた。

《東山様へ。》

今日は、ありがとうございました。さて、太平洋戦争下、浜松への艦砲について調べたところ、昭和20年7月29日の深夜に連合軍の艦艇8隻による艦砲射撃が行な

われ、2000発の砲弾が撃ち込まれ、170人が死亡したとありました。全く何も知りませんでした。浜松は、他都市と比較して徹底的に叩かれたのですね。これから勉強させていただきます。桑高。》

東山は桑高氏の調べの速さに驚くとともに、その熱意に感服した。同時に自分の記憶の確かさを知り、一気に浜松時代が蘇ってきた。

すぐさま東山は沖繩戦と浜松の艦砲射撃の日数差に注目した。

同じ年の昭和20年6月23日は、沖繩戦での日本軍の組織的戦闘が終わったとされる日である。

その日までに沖繩人の四人に一人、20万人を超える尊い命が犠牲となったとされる。

沖繩では毎年、6月23日を慰霊の日と定め、亡くなった人々の御霊を祭っているが、本土の人々がどれだけこの日を記憶しているだろうか。

この日沖繩戦を終結させた米軍は太平洋を北上し、ひと月以上もあとになって、東山がいた浜松を艦砲射撃したことになる。

そのわずか1週間後の8月6日に広島、8月9日に長崎に原爆が投下され、昭和20年8月15日に終戦を迎えた。

このひと月の間に降伏していたら、さらなる広島長崎の悲劇は起こらなかつた。

浜松の戦火は、すでに多くの沖縄の人々の犠牲の上にあったのだ。

自分の思考や人生観のルーツは、この戦争体験にあるのではと、彼は歳を重ねる度にそう思うようになっていたが、ここ沖縄に来て初めてあの戦争とは何だったのかを知らされた思いがする。

本土の若い世代は沖縄戦を知らない。

平和が当たり前に思うことは良いのだが、その平和は沖縄戦による沖縄の人々の犠牲の上に築かれたことを伝えなければならぬ。

あの日浜松で東山も死んでいたかもしれない。

建築も都市も人間の為に存在するはずだが、現実はそのようではない。

都市には人間が集まる。

集まれば肥大化を続ける。

戦争による破壊であれ、自然災害であれ、肥大化した都市は必ず危険をはらむ。そして人命が失われるのだ。

今も基地を抱える沖縄は、人間の生きている都市として危険に満ちている都市の一つに違いない。

基地をなくすことが沖縄人の願いだが、戦争で失った沖縄らしい都市を取り戻すことも大切ではないだろうか。

都市が過去の歴史と断絶すれば、人々はいつか都市を愛せなくなる。

暴力や犯罪が増えるだけでなく、人々の心は風化し、コントロールを失い、都市は自滅の道を歩む。

地道だが沖縄戦はもとより、あの琉球王国時代からの生き方をも自ら検証することを沖縄の人々には求められている。

一方で本土の人々も沖縄の歴史を知り、沖縄の人々を虐げてきた過去を反省し、改めて沖縄の人々の活動を支援しなければならぬ。

東山は自らにその責任を課していた。

十六 辻の散歩

昨夜は風邪気味のため、薬を飲んで早めに寢床についた。

薬が効かなかったためだろうか、明け方何度も目を覚ました。

風邪の具合を心配したが、あまり変わりがない。

こんな時は気分を変えて散歩するのが身体に良いと、旅慣れた東山は心得ている。夜が明けるのを待って、床をあげ、ドアを推して外へと出た。

沖繩のこの冬は寒い、と会う人ごとに言われてきた。

それでも東京に比べれば10度は暖かい。

ただし昼間のことで、朝晩は冷える。

彼は咳き込む喉を守るようにマフラーを巻き、マスクをつけ波の上神社に向けて歩いた。

天妃小学校の脇を抜け、上山中学校の正門前を通ると、いつものように小鳥が美しい声でさえずる。

猫たちがあちらこちらで騒ぎ声を上げる。

町家は静寂で、生垣のハイビスカスだけが寒そうに挨拶する。

那覇は先の大戦で焼け野原になった。

正確には本格的な沖繩戦に突入する前年の昭和19年10月10日に、米軍による空襲で全焼したもので、この辺りは壊滅し、僅かに上山中学校の躯体だけが残った無惨な写真を何度も目にした。

あれから70年の年月が流れ、いまではその傷痕を見ることはない。

一つ大通りを渡ると、そこはむかし遊郭のあったとされる辻である。

東山は20年程前、この辻のウイークリーマンションに一年ほど借りたことがある。その頃彼は台湾で建設企業の技術顧問をしていたが、週末になると沖縄に飛行機でやってきて英気を養い戻って行った。

沖縄が好きになったのもその頃で、将来は沖縄に住もうと決めたのも、思えばこの頃だった。

辻には今でも当時のマンションが建っている。

遊郭があったと知ってはいたが、なぜか辻遊郭のあったという地に足を踏み入れることは無かった。

今はラブホテル街と化している事もあるが、辻もさることながら沖縄を深く知ろうとまでには当時想いが至らなかつたのである。

こうして再び辻を歩いてみると、なぜか以前と違う感慨が湧いてくる。

コンクリートづくり安普請な家々が立ち並び、どう見ても廃墟のような家々だ。

ラブホテル街も目の先に見えるが、辻ではなさそうである。

路地を歩いていくとこんもり緑に覆われた小山が見える。

どうやら御嶽のようだ。

崩れた階段をゆつくり登ると、3つ並んだ墓のような祠が見える。
遊郭村・辻の開祖の墓らしい。

今も祀られているのだろう、花が飾られ、供物が供えられている。

東山はなぜか前にもここを訪れたことがある錯覚を覚え、手を合わせて祈った。

《不思議だ！まるで霊夫人がここに眠っているようだ》

そう言えば思い出した。

料亭松の下がこの辺りにあったはずだ。

御嶽の脇の階段は確かに松の下のものだ。

彼の記憶が蘇り、凜然として崩れた階段を登り始めた。

登りつめたところには大岩が置かれ、それらしき建物はない。

潰れたのか、はたまた彼の記憶違いか。

彼は事務所に戻るとウェブで料亭・松の下を調べた。

料亭・松の下は映画『八月十五夜の茶屋』の舞台になったことで知られている。

有名な上原栄子という、もと辻の芸娼妓（ジュリ）だった女性が開業した料亭だったが、のちに破産し、建物はすでに無くなっていた。

上原自身4歳の時に、家の貧しさから辻遊郭に売られてきた。

上原栄子の著書・辻の華を読むと、当時の遊郭・辻の暮らしぶりをつぶさに知ることが出来る。

また当時の遊郭がどのような建物で出来ていたかを知る手がかりが数多く書き残されている。

東山は辻の華から注意深く記述を読み解き、建物の形や間取りをイメージしていた。

それにしても周囲には当時をしのばせる建物は1つもない。

辻二丁目を歩くと、ジョージレストラン、バーミルクマン、など英語名の古い店舗が目立つ。

空襲で焼け落ち、遊郭辻が跡形もなくなった戦後、焼け野原となった辻に建てられたのは、米軍兵相手のAサインバー飲み屋街だった。

Aサイン(えーさいん、英語:A Sign)は、本土復帰前の沖縄で米軍公認の飲食店・風俗店に与えられた営業許可証であるという。

東山は当時のバーの様子が残る古い2階建の建物を見せてもらった。

1階の店の中には、米兵が座ったカウンターやソファ、デュークボックスなどが埃をかぶってそのままにされている。

当時の辻の街路は米兵の車の駐車で一杯だったと元経営者の女性が教えてくれた。本土復帰後、米兵は辻に来ることが無くなり、Aサインバーは閉店が続き、遂に辻は死んだ街になった。

今も店を建てなおしたり、改装したりする動きはなく、街は閑散としている。

御嶽と料亭松の下跡が、戦前の遊郭辻村のはずれであり、そこから坂を下って海の方角に、辻原墓地が広がっていた。

ソーランドやラブホテルが立ち並び道から、自動車教習所に突き当たるまでの間が墓地だったことがわかる。

つまり遊郭辻村は、まさに現在死の街と化している地域一体であり、ソーランドやラブホテルがある地域は、昔の辻遊郭ではなく墓地だったのだ。

十七 JUL 9 14 便 2015.2.20 08:30 那覇

明日の予定を変更して急遽帰京することになった東山の気持ちは重い。

先週来の風邪も治り、ようやくビールの味もわかるようになった。

今夜は武食堂で快気祝いのビールでも飲もうかと楽しみにしていたからである。風邪の間も食事だけはしなければならぬから、毎晩のように武食堂に通った。

武も精のつく料理を日替わりで作ってくれた。

こんなに良くして貰える单身赴任者なんて俺ぐらいか、などとまんざらでも無い気分だった。

ところが帰り際に「今日はまだ寄り道、なりませんぞ」といつも釘を刺される。そんな具合が悪く見えるのか、と東山は首をかしげる。

だがものの数分すると激しく咳き込む。

飲み屋に行けば皆の迷惑になるだろう。

ここは自制するしかない、諦めて帰宅した夜、霊夫人から奇妙な見舞いのメールが届いた。

「東山様へ

風邪がみですか？ ゆっくりお休みし、休憩する事がいちばん大切ですね。無理しないで頑張ってください。あなたの霊夫人より」

なぜ霊夫人は東山が風邪をひいているとわかったのか。

いや、これはきつと妹がどこかで俺を見ていて風邪と知って書いてくれたに違いない。

それにしても奇妙な出来事である。

どこか身近に霊夫人の妹はきつといる。

一体誰だろう。

機はいつもの通りのコースを順調に北へ向けて飛行すると、雲海が岩山のようになり、富士はどうとう姿を見せなかった。太陽は西に傾き、窓からは容赦なく強い光が射し込んだ。

十八 JAL913便 2015.2.24 11:30羽田発

東京は冬のこの季節、天気の良い日が続くのは珍しいと東山思った。

書斎から東京湾越しに見える富士も、どうとう4日間姿を見せず仕舞いだった。

彼が東京に戻ると、そこには相変わらずの日常が山積している。

いつそのこと日常をすべて沖縄に移したらとも考えたが、それでは沖縄の非日常が消えてしまう。

今の東山には非日常こそが生きている証しに思えるのだ。
重い気持ちを振り払うように、羽田空港へと玄関を出る。
リムジンを待つ列に並ぶ。

バスは来た。

自分の前で満席となり、乗れない。

ついていない。

バス停の前のカフェで次を待つ。

乗るとすぐに激しい腹痛に襲われた。

こんな日霊夫人が現れてもめめる元気さえない。

空港に着くまで苦しい時間が続く。

苦しさを少しでも忘れるため、彼は日霊夫人にメールを書き始めた。

「日霊夫人さまへ」

難しい話で恐縮ですが、僕は以前から、地上都市の他にもう一つの都市が必要であり、存在し得ると考えてきました。あえて名付ければ天空都市、とでも申しませうか。地上都市を三次元とすれば、天空都市は四次元となります。地上都市を日常とす

れば天空都市は非日常です。ではなぜ天空都市が必要か。それは地上都市があまりに危険に満ちているからです。人類は科学技術の進歩に合わせるように都市を造つて来ました。然し未だに自然は人類の企てを認めていませんし、人間同士の憎しみや争いが都市を破壊し、人命を奪つてきました。都市が人命を奪う、その場所はどこでいつなのか、それは神のみが知るところです。そしてそれを阻止することはできないのであれば、せめてその被害を小さくしたい。それが人を死なさない天空都市の役割です。」

東山はここまで一気に書き下ろしたが、腹の具合が治まらず気が遠退くようだ。するとあるうことか霊夫人に送信してしまった。

バスが空港ターミナルに着くと、彼はトイレに駆け込んだ。

落ち着きを取り戻すと、我に帰った東山は急に後悔し始めた。

《俺は霊夫人に何というメールを送ってしまったのだ》

彼は天空の富士が現れることを祈った。

良い写真が撮れたら霊夫人に送ってあげることが出来る。

その時に、先ほどのメールは間違いで送ったもので、削除していただきたい、と詫びを入れよう。

カウンターで空席をたずねると、富士が見える席はあいにく翼の上で、しかも脇に窓のない席しかないという。

今日は最後までツキに見放されたようだ。

雲は厚そうだ。

離陸するとすぐに雲に入る。

一層目の雲を抜ける。

前の席の窓をみると雲上に霊夫人がある。

出口を椅子の隙間から小窓に向けるが霊夫人は写らない。

悔しいが撮れそうもない。やがて上層の雲が次第に霊夫人を隠し始めた。

遂に何も見えなくなった。

無力感が彼を支配した。

もしもあの日、今日のような富士だったら、霊夫人に逢えなかったのだ。

人の出逢いほど不思議な縁はない。

東山は何もせず背を倒すといっしょか眠ってしまった。

那覇に着くや東山は魔物に取り憑かれたように沖縄の歴史を調べ始めた。

目的は戦前と戦後の境ですっかり変わってしまった沖縄の建築、とりわけ庶民の住宅と暮らしを詳しく知りたかったのである。

案300年と言われる中村家住宅も根間の息子の篤志の案内で訪れたことがある。琉球王国時代の沖縄の住居建築を知る上で貴重な建物ではあるが、庶民住宅とは程遠い上層農家の家であり、あの戦争からかなり遡る。

それでも沖縄の人々が家の理想像として追い求めたことに変わりなく、今では消えてなくなってしまった雨端やヒンプンの原型を見ることができ、東山には興味深い建物の一つとなった。

この時代に既におなじみの赤瓦の屋根があり、シーサーも屋根に置かれていた。

特にトイレと豚小屋の相関関係は、戦前まで続いた沖縄独特の自然エコトイレであったことは、戦後の人々が忘れている事実なのである。

一方首里にほど近い識名園もまた東山の興味を引く建築様式であった。

こちらも庶民の住宅どころか琉球王国の国王の施設であるから、参考になるものは少ないが、木造建築の技術という点で中村家同様、彼は評価していた。

しかしながらこれらに見る限り、庶民住宅の匂いすらない特別な建造物であり、観光名所であつて、それなりの資料もある。

ところが庶民住宅そのものとなると、図書館にも歴史博物館にも公文書館にも探す手がかりがないことに、改めて戦争の被害の大きさを知らされた。

間違いなく沖繩の建築の歴史の記録は、沖繩戦を境にして喪失しているのである。東山は無いものねだりしていても何も生まれないのだから、類推したり歴史の証言を聞いて少しでも正確に過去を取り戻すしかない。

彼は暇をみては根気よく手がかりになり得るものを探して歩いた。

二十 つかさ屋サロン

つかさ屋は、東山がサロンと呼んでいる行きつけの居酒屋である。

付き合いの長い友人の上原が紹介してくれた。

オナーの大城は昼間は魚屋を経営しているが、夜になると店は酒持ち込み自由な一風変わった居酒屋にと変身する。

コンクリートむき出しの部屋に、大きなテーブルが数組無造作に置かれ、客はグループで来ては賑やかに談笑する。

そのテーブル1台には大城自身が陣どり、付き合い仲間が気の向いた時に集まってくる。きては談笑するのである。

客のそれぞれが料理一品を注文し、皆で分け合って酒の肴にする。

安くて実に合理的だが商売にならないのが大城の悩みでもある。

彼は魚が売れて回転すればそれでよしと割り切っている。

内地人の東山は、最初の頃にはちよつと馴染めず、遠慮気味に参加する程度であったが、上原の勧めもあり、意識して通ううちに皆と親しくなっていた。

このサロンが東山にとって強力な情報源になり始めたきっかけは、彼が沖縄の歴史を沖縄人よりよく知っており、共通の話題ができて来たからである。

医療機器販売の喜屋武は、手がかりになりそうなウェブページを探し教えてくれた。大城は公文書館を教え、上原はどこそこの図書館に行けという。

一旦親しくなれば、会えば皆兄弟の沖縄人は親切そのものだ。

内地から単身赴任できている松尾も、東山同様に親しくなった1人だ。

サロンの氏神様のような新垣徹や若い乾物商の新垣史郎、薬剤師の山路や元警察学
校長の遠山、ホテル支配人の玉城、情報システム屋の美里など思い思いに酒を交わ
して東山にあるがままの沖繩を教えてくれる。

酔いが回ればお決まりの下ネタが場を一段と賑やかにする。

だが沖繩戦の話になると誰もがあまり多くを語ろうとしないようだ。

ウチナンチュウとナイチャーという言葉は今も沖繩で使われている。

歴史のもたらす心の傷は容易に癒されないことを東山は知ることになった。

東山が辻遊郭に興味を抱くようになったのは何故だろうか。

それは、人間には生まれ持った運命(さだめ)があり、辻は悲しいさだめを背負つ
た女たちだけが暮らす村であったからだ。

それだけではなく東山の生い立ちもまた深く関係し、その哀れさが他人事のように
思えない己の記憶が蘇ったのだった。

辻遊郭は1672年頃の誕生である。

沖繩の歴史書によれば、当時沖繩の農民は、大和民族の島津藩の侵攻によりもたら
された貧困に喘いでいたとされる。

農民は口減らしのために泣く泣く我が子を売った。

男の子は糸満の漁師に、女の子は仲島、渡地、辻の遊郭にである。

当時、遊郭がなぜできたのかは諸説ある。

それが琉球王朝の意図であれ、自然発生的であれ、それを必要とする事情が存在したのとは間違いない。

1944年の大空襲まで270年間も存在し続けた事実を説明できる継続した事情とは何か。

そこに琉球王国と中国や大和との長い交流があった。

大勢の交易商人や船員たちの慰めの場が必要であり、中国から数百人と言われる冊封使一行の長期滞在のもてなしの場が必要であった。

自ずと社交上の性格を持つようになり、単なる性のはけ口の間ではなないことが容易に想像つくであろう。

しかしどのような事情からであるにせよ、売り買いされた子供達のさだめは、余りに哀れすぎるのだ。

当時、辻遊郭のほかに仲島遊郭、渡地遊郭があった。後年、二つは辻遊郭に統合された。

その仲島遊郭に売られた遊女・吉屋チルーの話は有名で、沖縄の誰もがその名を知っている。

彼女は卓越した歌人であったが、そのさだめに抗し、19歳の若さでこの世を去った。

母主や良かてい 生まれ島いめい 我身や仲島ぬ 粃ぬ一粒

(母と父はしあわせに 生まれ故郷においでになり 私は仲島の粃の一粒だ)

東山はこの歌が刻まれた歴史案内の碑を、つかさ屋の近くで偶然見つけた。

仲島遊郭はどうやら、つかさ屋のすぐ近くにあったらしい。

つかさ屋は現在の那覇市役所の右脇を右に入ったところであり、当時この辺りに人工の堀があった。

そこからさらに右手、バスターミナルがある脇に、今も仲島の大石があり、堀と大石の間が遊郭だったところである。

つまり、吉屋チルーはつかさ屋の近くに住み、生涯を終えたのである。

東山はもつとチルーのことを知りたくなかった。

チルー(1650年～1668年)は沖縄本島の中ほどにある農村の貧しい農家に生まれた。現在の沖縄県はかつて琉球王国であった(1429年～1879年の450年間)。

中国と大和の間に位置する南海の島々は交易で栄え、人々は平和に暮らしていた。ところが1609年、大和の薩摩藩島津氏が侵攻し、武力に劣る琉球王国は事実上崩壊してしまふ。

以来農村の暮らしは困窮を極め、やむを得ず子女を遊郭に売るものが続出した。チルールの住んでいた場所も特定されていないが、現在の読谷村ではないかと言われている。

そんな具合だから家族が何人で、ほかにも売られた子がいたのかなど知るすべはない。

彼女は8歳で売られた。

読谷村から仲買人に連れられ、歩いて那覇に向かうチルールが、途中、比謝川にかかっている橋を渡る。

その時に故郷を振り返り、涙して歌ったとされる詩がある。

「恨む比謝橋や 情ねん人ぬ 我身渡さとも思て 掛きてうちえさ」。

恨めしい比謝橋よ お情けのない人が私を渡そうと思つて架けておいたのでしよ
うか。

今でいえば小学二三年生の少女である。

たとえ詠み人が彼女であったとしても、当時の記録事情を思えば今日詩が残っていること自体奇跡に近い。

しかし彼女は仲島遊郭に入っても詩を作りつづけ、その才能は巷に広く知られていた。つた。

廓の女性の心情が綴られた詩が数多く残されている。

この詩もおそらく一連の作品の一つとして、後年注目されるようになったに違いない。

現在も国道58号線の比謝橋のたもとに歌碑があり、訪れる人々に当時を偲ばせている。

吉屋はチルールの苗字ではなく、遊郭の屋号だった。

吉屋楼とでも言ったのであろうか。

遊郭仲島は小さな島であって、那覇市街との間はいくつもの小橋がかかっていたと言われている。

仲島遊郭は1908年に辻遊郭に統合を余儀なくされているので吉屋チルールの生きていた時代より200年以上も後年のことということになる。

よって吉屋チルールが辻遊郭にいたという話は史実に合わず、単なる間違いである。

300年以上も昔の出来事なので、地図らしきものも残っておらず、チルールの暮らしぶりを知る資料は全くないと言っただけ。

仲島遊郭が取り壊された後は周囲の埋め立てが進み、わずかに仲島の大石が現代に当時を偲ばせてくれている。

チルールがなぜ十八の若さでこの世を去ったかについても諸説あるが、当時の階級社会を形成してた士族・仲里按司との悲恋の末の自殺というのが定説のようだ。

東山は偶然、沖繩のテレビで金城哲夫監督の映画「吉屋チルール物語」を見た。

そこでは仲里按司は遊郭の客ではなく、チルールの詩の良き相手として描かれている。二人はやがて愛し合うようになるが、按司には正妻がいる。

その正妻も二人の仲を認めているが、仲里按司は妻を思いチルールの愛を受け入れることができず、心ならずもはねつけてしまう。

チルールは絶望するが、不本意にも遊び客の一人がカネでチルールを廓から見受けしてしまったことを知る。

チルールは髪からカンザシを取り、その客を殺して、自らも命を絶ってしまおうと決心するのである。

チルリーの死の真実はもはや誰も知ることはできない。

しかしそんなことを情緒的に考えても何の意味を持たない。

東山には、沖繩の遊郭自体が、生まれながらチルリーのような運命(さだめ)を背負った女性たちだけの社会であり、自由な行動も許されずに死んでいった女性たちにとつてそこは生き地獄ではなかったのか、と思われてならない。

どんな理由であれ、子供を他人に売らなければ生きられない世の中は間違っているものであり、そうした社会を作り出した王府の役人や大和の権力者たちは決して許されるものではない。

しかし悲しいことに人間は環境の動物と言われるように、行動様式と建築様式とは密接に係る。

戦争や災害や人間の理不尽な行動様式が環境や空間を左右し、反対にされやすい習性がある。

もとより建築に世の中を変えるほどの力はないが、東山は悲劇の舞台となった沖繩の遊郭建築をもっと知りたいと思うようになった。

こうした悲劇を生まない建築などありえないだろうが、悲劇の舞台となった建築を知ることで暮らしぶりを検証することができる。

沖縄の建築資料を探し始めて程なく、仲島遊郭についてはないものの、辻遊郭に関しては手掛かりになりそうな写真や記録が比較的多く残されていることが分かってきた。

辻遊郭はどうやら、沖縄の歴史の中では人々の関心の高い特別な地域として扱われ、写真や記録の残す機会が他の地域に比べ多かつたのではないか。

とりわけ坂元商店発行の絵葉書が目につき、絵葉書で歴史の記録を残してくれたことは奇跡に近いと東山は感じた。

辻を徹底的に調査すれば、そこで得られた建築のデータは、当時の少なくとも那覇を類推することに不都合はないと彼は考えた。

東山は辻の古い写真を見るたびに、その背景に立つ郭建築を凝視し、手がかりを探そうとした。

また建築ばかりでなく、当時の暮らしぶりや、なぜ辻遊郭が生まれたかの史実にも関心を抱き、資料を集めて行った。

東山はあるアイディアを思いついた。

戦前までであった当時の辻遊郭を、現在の地図上にプロットして、当時がどのように変わり現在の辻に至ったかを知ろうと考えた。

まず那覇市の現在と、戦火で焼ける前の地図を探すことから始めた。

現在のものはすぐ手に入るが、戦前の古い地図がなかなか見つからない。

わずかに戦前の那覇を紹介するパンフレットに見つけられる程度で、不鮮明なものを重ねるには結構技術が要る。

また昔は測量技術が進んでおらず、縮尺も不明なので正確に重ね合わせるのが難しい。そこで両方の地図で明示されている御嶽の位置を三ヶ所探しマークする。

出来た三角形ができるだけ重なるよう画像を操作すると、ほぼ間違いない地図が出来上がった。

東山は出来上がった重ね地図を見て驚いた。

辻の東側に接して南北に走る上の蔵通りが、昔と今では位置が大きく違うのだ。

そのため辻の遊郭街が今日言われているよりもかなり大きかったことが想像できた。

また区画整理で街路が変わっても御嶽は変わらないだろうと考えた。

それからすると現在のラブホテル街は旧辻遊郭でなく辻原墓地であったことが地図の上で判明したのだ。

その後の調べでは辻原墓地は識名霊園に移転されている。

さらにこの地図に当時の遊郭の図を重ねると、家の数や屋敷の大きさがわかり始めた。

ある穏やかな日の朝、東山はiPadに出来たての重ね地図を入れ、辻に向けて散歩に出た。

上の蔵大通りを渡ると、三本の道が横切っている。

東山は、戦後の区画整理でも、旧辻村の街路は戦後の街路に近い位置にあることに気付いた。

旧辻の時代には、上の蔵大通りに近くから順に、端道、中道、後道と呼ばれており、この三本の道沿いに遊郭が建てられていた。

だから今の道を歩くと、ああ、このあたりに〇〇楼があつたんだ、などとおよその位置が推測できる。

辻は何回か大火に見舞われ、そのたびに道が広がっていった。

戦前の街は、現在とほぼ同じ道幅となっていたと思われる。

また辻には3000人近い女性が暮していたと思われる。
人数からして相当な数で、どんな規模や間取りの家が立ち並んでいたのか、東山は
ますます辻の史実を知りたくなってくるのである。

一一二二 JAL919便 2015.3.22 14:55羽田発

春休みに入って、羽田も那覇も空港は人で混雑し、乗れる便も限られるようになった。
た。

朝出て昼には着く、慣れ切った空の旅も、この季節は思うに任せない。

平日は仕事が増えて移動が難しくなったこともあり、日曜日とはいえ移動日にせざるを得なくなったのである。

しかし東山は最近の慌ただしスケジュールを考えると、休日の一人旅はむしろのんびり出来て嬉しい。

ラウンジで3時間以上も待つのだが、仕事をするには丁度良い時間でもある。

彼は春霞のかかった滑走路風景をボンヤリ眺めながら、こんな日の霊夫人の佇まいを想像していた。

またすっかり習慣になってしまった霊夫人へのメールも考えていた。

機内のWiFiが使えるようになってからは、iPadに思うがままを書き付け、終われば機内から送信する。

始めから終わりまで天空であることが、東山には自分が許せる唯一のケジメであった。

死者へメールするという不条理は、非日常だからこそ現実に起きている。

日常では決してあり得ない。

バーチャルリアリティとか仮想現実とかは、コンピューターの中に実際起きているように想像するが、生身の人間は関係しない。

東山の死者へのメールは、ブログやツイッターに近いが、主体があって受け手が無い点で特異である。

何よりも東山自身が何を書いたから言っ、誰にも迷惑を及ぼすことのないのである。

「霊夫人さまへ

僕は最近、貴女と辻遊郭が重なって見えるようになりました。つまり貴女は辻（チージ）の遊女（ジュリ）の霊ではないかと。もちろん時代背景は違いますが、沖繩の

女性の悲しみや儂さは、いまでも続いているように思えてなりません。貴女は亡くなる前に僕と天空で出逢った。以来あなたを忘れることが出来なくなつた。琉球女性の貴女は大和男の僕に何かを託したかつたのではないでしょうか。思うに、辻は沖繩の過去の悲劇を象徴するところですよ。昔大和が琉球王国に攻め入りこれを滅ぼしたため、沖繩に貧困が生じ、農民たちは生きるために、娘を辻遊郭に売りました。辻遊郭は女性たちだけの遊里となり、大和の役人や中国からの冊封使を歓待する役目を負わされました。しかし歴史をよく学ぶと、辻は俗にいう性を売る遊郭ではなく、女たちだけの社会として長く沖繩の歴史の中に存在し、琉球文化の担い手として後世に功績を残しておられます。最近の研究では遊郭の文字は辻に似つかわしくなく、再評価すべきであるとさえいわれます。今、辻の町を歩くとき、人々から忘れ去られ、まるで廢墟のような建物ばかりが並び、僕の心が痛みます。僕は今、沖繩のために、辻のために何をすべきか、何をしてあげられるか、真剣に考えています。それはチーヅを建築家ロボットで復元して、あの時代の暮らしや文化をイメージできるようにして差し上げ、すべての人々に辻の再評価をしてもらうことです。幸い僕は建築士ですから、昔の辻の建物を理解できます。他の街に比べ辻は当時那覇の中心街で幸いいろいろな写真が残っていますから、これを参考に建物を復元してみたいと思います。この時代の民家は平家が多かつたのですが、遊郭には平家のほか二階建て、中には三階建のものもあ

り、当時の木造建築技術が優れていたことを示しています。まだ調査の入り口でこの先大変ですが、お力をお貸しく下さい。東山より」

一十二 ジュリ馬

「霊夫人さま

今日、ジュリ馬行列を、見る事ができました。最近勉強した辻が舞台なので、理解ができてすごく参考になりました。関係者の挨拶の中で、沖繩市博物館すなわち沖繩市が、最近辻から遊郭の表現をなくす歴史解釈の変更を行ったと説明し、辻村（チージ）は大和の吉原のような遊郭でなく、薩摩侵攻もたらした農漁村の貧困による女性主体の街だった、と説明しました。僕が読んだ官製資料が全て遊郭としていたのに対し、最近出版された「辻とじゆりの物語」ではそれを否定、正当な評価をしています。その著者浅香さんという女性（なんと博士）も東京から来てジュリを演じ、会場で皆に挨拶し僕もお会いしました。神事のあとの奉納演舞が多く、観光客を呼び、かつて大綱引き、ハーリーと並んで那覇三大祭りと言われたジュリ馬行列が復活するのも近いと思われます。しかし沖繩の女性の中には辻やジュリを快く思わない方もた

くさんおられます。でも真実を知らずしてジュリ馬の祭りだけが独り歩きするのは、沖縄県民や観光客にとつて何の意味を持つのでしょうか。歴史にふたをせずにあるがままを見てもらうことこそ沖縄の未来のために大切なのではないでしょうか。今日は踊りを指導している女性師匠にも面会し、僕の目的を説明し、協力いただけることになりました。辻の歴史評価が正されることとあわせ、旧辻街をイメージで復元する事が、沖縄の人々のアイデンティティーを高める上で大事ですと言いました。20年前最初に住んだのも辻でした。今また東町というすぐ近くに事務所を持ったことは、この仕事が僕の天命のように思えます。そして何よりも心強いのが貴女の存在です。沖縄女性のさがをもち、美しさと知性を備えた貴女こそが、女だけの街辻の正しい歴史評価を回復させるにふさわしいイメージの女性です。僕を影で支えていてくだされば、この大仕事を頑張り抜くことができます。今日はそんな思いを強くした良い日でした。東山より」

ジュリ馬を見てからは、踊り子たちが鳴らす鈴の音が、東山の耳をいつまでも離れなかつた。

シヤン、シヤン、シヤン、・・・・

ある日曜日、東山はジュリたちを偲ぶ歌を作ることを思い立った。

△シャン、シャン、シャンの鈴の音が・・・▽

△シャン、シャン、シャンの鈴の音が・・・▽

思いつくままに歌詞を書き留め、メロディも自分で口ずさむ。

曲もつけてみたくなり、パソコンの電子ミュージックで作曲し演奏してみた。

完成すると子供のころから好きだったハーモニカを取り出し、哀愁を込めて吹いてみた。

吹くたびに心に浸みわたるはなぜだろうか。

3月も後半になると沖繩の寒さは和らぎ、一足早い春の陽気の日が続いた。

この季節はまだ湿気もなく、早朝の散歩は実に気持ちがいい。

なんとという名の小鳥なのか、ピピピピッと甲高い声をあげて樹木や屋根を飛び交う。

天妃小学校では校門前に先生が立ち、登校して来る子供達一人一人の名を呼んでいる。

名を呼ばれた子供はおはようございます、と大きな声で答えている。

上空をオスプレイが一機、轟音と共に飛んで行った。

東山の本格的な辻考察が始まったのは、それから間もなくであった。

辻遊郭は1609年、薩摩藩島津氏の琉球侵攻を経て、1672年に今の辻町に誕生したと物の記録にある。

しかし1502年という説もあり、発祥は定かでない。

東山は、まず昭和10年に那覇市が作成した「那覇市全図」という地図を探した。手書きだが他のどの地図よりも信頼できそうである。

この地図を現在の地図に重ねれば、当時と現在の道路や街の様子の違いが判るはずだ。

しかし1/6000という縮尺のため、不安が残る。

そこでさらに昭和8年の1/4200の地図を重ねてみた。すると3つの地図がほぼ重なってきた。

次に旧辻遊郭のいくつかの図の中から、比較的新しい年代の図を探すことにした。

考察を進める中では図以外に写真や資料が残っている可能性があることと、3度の大火で消滅したり、その際道幅を広げて建て直したりと部分的に変遷していて、時代に辻褄が合わなくなる心配もあったからだ。

彼にとつては、集めた図の中から最も新しいとされる図の特定は比較的容易だった。タイトルに旧辻遊郭之図とある。

この図には、終戦直前、那覇警察署が遊郭取り締まりのため作成したと添え書きがある。

辻遊郭は1944年（昭和19年）10月10日の空襲により消滅したのだから、図そのものは間違いなくその日以前の作成だろう。

とすると添え書きは後日書き加えられたことになる。

この図を3つの地図に重ねていく。

図にはもとより縮尺がない単なる区画割図だから、そのまま地図に重なるものではない。

そこで記載されている道路が当時の地図に重なるように図を変形させていく。

辻遊郭には端道（前道）、中道、後道の三本のメインストリートがあり、これに交差するように5本の小路があった。

その真ん中の小路によって辻村は2つに分かれていた。

この小路の中心にはガジュマルが数本立っていて、その中心線で村が分かれていたと記録にはある。

戦後の区画整理で旧辻村の街路は完全に消滅し、いまその形跡は残っていない。

しかし御嶽と呼ばれる人々の拝みどころは今もあり、それを手がかりに当時の地図を重ねていく。

するとおぼろげながら、当時の街路の位置を知ることができる。

2つの村には、それぞれに拝みどころがあった。

その一つは今も波の上神宮のほど近くであり、ジュリ馬祭りの行われる場所だ。

しかしもう一つは当時存在したところにはなく、ちよつと離れた場所に位置する。

区画整理の際無くなったのだろうが、辻の人々は今の場所に移し、信仰を続けているのではなからうか。

東山は、こうして当時の辻遊郭の場所や大きさを特定してみると、現存する写真風景がどの場所であったのか、街路はどんな様子だったのかを知りたくなった。

そこで暇を見つけては那覇市歴史博物館や古書店を訪ね歩き、写真という写真をすべて集めてみた。

また当時の遊郭での人々の暮らしぶりを歴史書や郷土誌に当時の写真を探し求めた。

その中には、場所を特定できる遊郭の名前があつたり、興味深い遊郭の遊びや間取りや風景の記述があつたりして、彼の好奇心は一気に、遊郭建築の復元へと向かつていったのである。

東山の推計によると辻遊郭の全体広さは、戦争直前には、約56,200_≒2 (約17,000坪) あつたと推定される。

おそらくこの規模は辻遊郭の歴史の中で最大であろう。

その中に立つ遊郭建築はすべて木造で、ほとんどが二階建て、中には三階建てもあった。

建物の数は、一宅地に一軒ないしは二軒で、そのほとんどが遊郭であつたから、区内の200棟程度の建物が軒を連ねていたのである。

一棟当たりの宅地の面積は、小さいものは40坪、大きいもので100坪程度、平均して約200_≒2 (60坪) 程度でさほど広くはないので、二階建てとしても、6畳乃至8畳の和室が10室取れば、という大きさだろう。

ところでジュリと呼ばれる娼妓の数は、美妓三千人と表現されたほどだから、大変な数といえるが、3000人が200棟に住んでいたとして一棟当たり15人は少し多すぎないだろうか。

大正3年の記録には娼妓数1000人強とあるので、大きい廓で20人、小さければ5〜10人程度が一つ屋根の下に暮らしていたと思われる。

また昭和9年発行の書物には、昭和7、8年ごろの辻遊郭には176軒の遊女屋があり、329人の女亭主が貸座敷業を営んでいたとある。

遊女の数は1500余。その内訳は457人の娼妓、211人の芸妓、484の雇女（遊女の見習い）がいたと細かいが合計が合わない。

娼妓のほかにはアンマーと呼ばれる抱え親や、売られてきたばかりの若い娘たちも一緒に暮らしていたが、男性が廓に住むことはなかった。

こうしてみると時代の推移によって、人数やその構成にはかなりの違いがあるのがわかる。

辻遊郭は先の大戦の終戦の前年に、空襲で全焼し消滅したが、その数年前からは日本軍が駐留し、多くのジュリを慰安婦として徴用した。

戦争に向かって辻の存続が危うくなっていたとすれば、戦争前の辻を全盛期の姿とするには無理がある。

一体いつの時代を辻遊郭としたら良いか。

この問題は到底東山の手を負えるところではなかった。

遊郭建築としての間取りはこうであろうか。

一階には街路との間に高くて堅牢な石塀を配し、仲前と呼ぶ幅二間の大玄関があり、玄関の戸が馴染み客以外の出入りを厳しく制限していた。

一階には主人であるアンマー（娼妓たちの抱え親）のほか、見習いの娘たちの部屋があり、長い廊下を行く来客の監視をしていた。

二階、三階には主に娼妓が客のもてなしに使う裏座という座敷が並んでいた。

裏座は8畳間ほどの個室で娼妓たちの住まいでもあり、ダンスや茶ダンス、チャブ台、長火鉢が置かれ、押し入れや床の間もあった。

部屋には家事ができる小道具一式がしつらえてあった。

部屋には明りが必要だから、障子を挟んで廊下があり、その外側に板の雨戸だけの腰窓があった。

板戸は戸袋に引き込む形でまだレールのない溝だけの敷居を引いたであろう。

この雨戸が、辻の街路に面して配され、夜には開け放たれて不夜城のように道行く人々を魅了したに違いない。

またこの窓はジュリ馬行列を眺める格好の場でもあり、当時の写真がその光景を収めている。

敷地の間口が狭くて奥に細長い場合は、採光を考慮した配置となつたろう。

座敷と雨戸の間に廊下を配さず、直接雨戸で外気を遮っていた場合もあったろう。トイレは、以前はフールと呼ばれる屋外の豚小屋と併設であったが、大正時代にお上から改造を命じられ、屋内になったとされている。

二階にトイレはなかったであろうから、長い廊下の突き当りに階段があり、下りた一階のそのあたりにトイレや洗面所、浴室が設けられていたのだろう。

一階には女たちが料理をする台所と土間。土間には煮炊きをするカマドがある。アンマーの部屋とは別に仏間があり、狭ければアンマーの部屋に仏壇があったのかもしれない。

街路に囲まれた区画数は、村全体で18区画。

各区画には5〜18の宅地があり、そのほとんどが2階建ての廓建築とすると、かなり密集しており、火事になればたちまち延焼してしまふ。

事実上は過去3回の火事に見舞われ、大正8年の大火では一夜にして1〜3が焼けたという。

この大火の直後から建てられるようになったのが大和風で、床の間つきの裏座が作られるようになり、広さも10畳間が多くなった。

一人前にならない少女たちには、アンマーの隣の3畳か4畳半があてがわれた。

この少女たちの仕事は、豚の飼育であった。

豚のえさの芋の皮を買いに行く仕事だが、これに残飯を入れ味付けした餌を豚にやるのは姉さんジュリたちであった。

アンマーはこの少女たちに教育を与え、芸を教えたのである。

実家が貧しいのは農家ばかりだなく、町方でも借金や貧乏などの理由で10歳前後の娘をアンマーに売ったという。

豚小屋が無くなり、トイレが家の中に移ると、少女たちの仕事は無くなり、歌や踊りのけいこに励むようになったという。

当時の暮らしにとって水はどうしていたのだろうか。

辻という場所は海に近く、井戸水は塩分が多くて飲むに適さなかった。

勢い天水が大切になるがそれでは足りないので、売り水を買いかめに貯めて使用したという。

辻の女性たちの湯浴みにはこの水が使われたというから、さぞかし水には苦労したことだろう。

沖繩に初めて電灯がついたのは1909年（明治42年）と物の本にある。

それまではランプであったろうから、辻の女性たちの日々の仕事も、現代と比較にならないものであったろう。

しかし花街には電灯よりもランプの方が風情があり、街路の夜道の風景も電灯化で随分と変わったろう。

火災の発生も以前より少なくなっただと思われる。

東山は、遊郭に大小はあるものの、辻全体のおおよその建築機能はほぼ同じであろうと考えた。

しかし那覇市の一般的な住宅が平屋建てなのに対し、辻の建築はなぜほとんどが2階建以上なのか。

それは敷地が比較的狭い上に、辻遊郭独特の風習、すなわちジュリ一人一人が独立した生活ができるだけの最低限の広さと部屋数を確保するための知恵であったのではと、彼は推理する。

だがそんな物理的な理由だけで、はたして説明し切れるのか。

そうではなくもつと人間臭い大きな理由が沖繩の歴史の中に存在し、その結果としてあの形が作り出されたのではないか。

今はこの世にない辻遊郭を思い浮かべる彼が、最も注目している言葉。それは「高樓」という表現であった。

辻遊郭は公然と性を売る不条理の世界である。その不条理を生業とする廓の女性たちに対し、家庭主婦たちは当然認めがたい感情を抱こう。

その感情に逆らうかのように男性たちは不条理を求めて廓通いをする。それにも良心の呵責があるう。

せめて日常と違う、非日常の世界に居るのだと自らを納得させたい。

「高楼」は男性たちにとつて非日常の世界の代名詞ではなかったか。

遊郭の「郭」とは城、砦、街などに巡らせた囲いを意味するが、琉球石灰岩の高い塀の向こう赤々と明かりを灯してそびえる高楼こそ、男と女の非日常に相応しい建築像であつたに違いないのである。

ところで沖縄の伝統的建築は、古くは木造平屋建ての「茅葺」であつた。

戦後アメリカの影響を受けて鉄筋コンクリート造（RC造）が主流になり、焼け野原となつた辻村一帯は区画整理され、アメリカ兵のためのRC2階建てバーが沢山作られた。

戦前までの沖縄住宅といえは木造平屋建ての「琉球瓦」あるいは「スレート瓦」屋根だつたのである。

「茅葺」と「琉球瓦」とでは重さが極端に違う。

沖縄を歴史的に大きな地震がないが、毎年巨大台風がやってきて、「茅葺」屋根を吹き飛ばして行った。

「茅葺」から「瓦葺」に変わっていった経緯にふれないが、木造工法もまた「瓦葺」の重量に耐えるだけの強度が当然ながら必要となった。

東山は、以前中村家を訪れたとき、重い屋根を載せる琉球人の知恵に驚いたものだった。

重い屋根を載せた木造建築が、強い横風を受ければどうなるか。

屋根は飛ばなくても横力と重さで壊れやすくなるのだ。

そのため台風を避けるため屋敷の裏に山を背負い、琉球石灰岩の石垣、フクギと呼ばれる防風樹で前面を防護し、強風が家の屋根を通り過ぎるように工夫してあったのだ。

これに比べて辻の2階建建築はたして大丈夫だったのだろうか。

当時の写真から見ていずれも「琉球瓦」で葺いた屋根であろうと思われる。

1階は高い石塀で囲まれているし、お隣同士も密接していたろうから、強い風の影響は少なからうが、2階や3階が気になった。

辻遊郭は歴史上三度の大火を経験しているという。

三度目の大火は1919年（大正8年）で辻の1〜3（半分という説もある）が焼けた。

これで辻遊郭は無くなると思われたが、直後から復興し、再び建物で埋め尽くされた。

道路は以前より広くなり、建物は大和風が多くなった。

沖繩の間取りの単位つまり畳の大きさはどうだろう。

大和の影響を受けているからと言っても、大和にさえ関東間、関西間、中京間などいろいろなサイズがある。

沖繩を歴史的には九州の影響を大きく受けているから関西間と思ったが、沖繩をなぜか中京間だという。

中京間は関東間と関西間の中間的サイズだが、関東で使う間取りの一間（1820^目）が畳のサイズというから若干大きい。

東山は裏座の写真を見て、畳の作り方や畳の配置にも注目してみたが、多くは本土同様に縁があり、八畳間の取り方も似ている。

沖繩には琉球畳という、正方形で縁のない独自の畳があるようだが、それが何故辻遊郭では使われてこなかったのか。

これは東山の推測だが、辻の建築は他の沖繩建築と比べれば、大和の影響を強く受けていたと考えるのが自然だろう。

また大正時代の大火以来、多くの大和風建築が建てられたという。

明治以降で写真に残るこの時代の沖繩建築は、琉球畳のではなく大和間の和室が主流であったのではないだろうか。

こうしてみると建物の高さや階高についても、大和建築の影響が強かったのではないかと推測できた。

一一五 巴楼・衆楽楼の復元

特定が困難な戦前の辻遊郭の写真の中にあつて、楼名がはっきりしていて場所がわかる写真が一枚ある。

巴楼と衆楽楼が敷地を真つ二つに分けあい、仲前と呼ばれる玄関口も隣り合わせである。

写真では遊女らしい女性が三人、外に出て何やらお喋りをしている。

当時の辻遊郭の姿を十二分に表現している。

この写真はしかし、どこから写したのか。

中道を挟んで反対側の楼からか。

撮った者の意図と撮った角度が東山には不思議に思えてならなかった。

まず楼は二階建てで、三階建てではないと考えた。

そして特に関心をいただいたのは敷地が奥に細長く、しかも二分していることにある。

当時の地図では一宅地となっている。

つまり地番は同じということになる。

東山はこの二つの楼は背中合わせの対照的な建築物ではないかと想像した。

とすれば片方はせいぜい間口が三間程度で、八畳間が奥に並んだとして5室もとれるかどうかの大きさと判断できる。

東山はまずこの建築物をモデルに辻遊郭建築の標準的な間取りを考えてみることにした。

仲前（遊郭の玄関口）は中道に面し、敷地の中央から二樓が隣接していることは写真が証明している。

しかも仲前は幅二間と言われるほどに広いことを考えれば、それだけで四間にはなる。

仲前を入ると、廊下が真つすぐ奥へと続く。

客の通り道であり、廊下幅は一間あったかもしれない。

部屋は片側にしか配置できず、客間・仏間・アンマールの部屋・抱え娘の部屋が並んでいたろう。

そして廊下の突き当りに二階への階段があり、上がればジュリたちの部屋が並んでいる。

部屋は一列に並び広さを八畳間とすれば5室がやっとであろう。

部屋への廊下は幅半間。

押し入れが部屋との間を埋めている。

部屋を入ると正面は明り取りの窓で廊下を挟んで障子で仕切られる。

タンスが各部屋の境に並び、個室のプライバシーを保っている。

二階廊下はジュリの部屋全体を囲むように配され、一階よりも外側に迫り出し、寄棟の瓦屋根とともに高樓のイメージを作り出していたのではないか。

一二十六 三階楼の復元

敷地が狭く、二階建てでは部屋数が足りない楼の建築は、当然ながら三階建てを考えたであろう。

ところが大火の前に建てられていたという三階屋は、写真を見る限り相当大きな建築物であることがわかる。

そこで写真を頼りにこの建物の考察を東山は試みた。

敷地を特定するには材料が足りないので、これはあきらめることにした。

二階を一階より外にせり出し、三階を一二階より中にセットバックする架構は、楼閣としての風格を出すに十分である。

それにしても木造三階建てにはかなりの技術力がある。

当時の写真を見ると二階、三階の開口部は大きく、どんな木材を使い工法を用いたのか。

これを検証するため各階の間取りを想像してみた。

階段位置は真ん中が妥当で、階段を中心に部屋を配置する。

客は幅二間もある仲前（玄関）の外に立つ。

中からはその声でジュリが迎え入れる。

一階の廊下幅は広くホールとなり、客間、アンマールの部屋、抱え娘たちの部屋、共同トイレ、土間が囲んでいる。

二階に個室が8室、三階に4室の計12室が想定できる。

三階の4室は多少無理がありそうだが三階にするには最小限この数はほしいところだろう。

最大20室の例もあった辻遊郭の規模からして12室は中程度といえるか。こうしてみると敷地は平均値より広いので、二階屋でも間に合うはずではないか。三階屋に敢えてした意味合いは、やはり楼閣イメージを狙ったものと思われた。

一二十七 建築イメージに挑む

東山がいよいよ辻遊郭の全体イメージを構築する時がやってきた。

建築の復元には模型が上等だが、それにはお金がかかる。

今の彼にその余裕はないが、もとより大規模な街であるから模型はなじまない。

まだイメージが大切な段階でもあり、これですべてが終わりになるものでもない。使うは彼自らが長年開発してきた建築家ロボットHALである。

地球上の様々な建築イメージを作成できることから「ガイア」と名付けていた。

「ガイア」は俗にいうパースペクティブ（透視図）をコンピュータで作成することができるが、元になるデータは描いたばかりの間取り図から自動的に作成された間取り図さえできればあとは時間がかからない。

まずは辻遊郭全体の規模や形がわかるパースを描き、これをグーグルアースの写真に嵌め込む作業に入った。

当然ながらグーグルアースの写真は最近のものだから旧辻村全体のパースが写真に乗るはずはない。

那覇市の現在のどの場所に、どのような規模の遊郭があったのか、逆にその食い違いを知りことも今回の重要な検証テーマであった。

こうして遂にその全容が姿を現したのである。

二十八 十・十空襲

東山はその夜、奇妙な夢を見ていた。

あの三階楼が燃えているのである。

その火が瞬く間に燃え広がり、巴楼と衆楽楼も火に包まれた。

辻遊郭のあちらこちらで煙があがり、まるで映画に見た吉原炎上の光景のようだ。

こんな大火なのに、住んでいるはずのジュリやアンマーや客の姿がなく、声すら聞こえないのはなぜなのだろう。

一体、何があったというのか？

すると、中道を一人の老婆が一人の若い娘に手を引かれ、急ぐこともなくトボトボとした足取りで、男の方に向かって歩いてくる。

娘は恥じらうように、男の目を避けた。

男はおばあさんに声をかけた。

すると老婆はつぶやいて言った。

「空襲だよ。もうすぐ敵機がやってくる。お前さんも逃げないと殺されてしまうよ」

「遊郭の皆はどうしたのですか？村にはもう誰もいないのですか？」

「みんな逃げたよ。この遊郭はもうおしまいさ」

「お婆さんは逃げないの？」

「わたしはもう年寄りだ。皆の足手まといになるだけだからね。ここで死ぬ。この娘だけでも連れて逃げてやってくれんかね。この娘はわたしと死ぬと言って離れない」

「そんなことはダメだ。おばあさんも僕と一緒に逃げましょう」

男は老婆を背負った。

「そんなことしたら三人とも死んでしまうよ」

老婆は男の背でささやいた。

「おばあさん、どっちに行ったらいい？」

「そうだね。上之蔵から役場に行くかね」

「役場って市役所かい？あっちの方がもっと危なくない？」

「わたしの家の者が向かった。会えるかもしれない」

「わかった。市役所に行こう」

娘は一言も口をきかず、黙って案内を始めた。

年恰好から一目でジュリの見習い女とわかるが、男にはそんなことを考えている余裕はなかった。

頭上をグラマンが4機、編隊で飛んで行った。

見つければいつダダダダダと機銃掃射で撃たれないとも限らない。

三人は小さな路地を選んで休み、多少下り坂の上之蔵通りを那覇港方向に向かって歩き続けた。

港のタンクや船が燃えているのか、黒煙があちこちで天に向かって登っている。

三人とは反対方向に逃げるのだろうか、家財道具を乗せた荷車を引く幾組かの家族とすれ違った。

太陽は頭上にあり、昼頃かもしれない。

「昨夜は、軍の兵隊さんの集まりが料亭であって、辻(チージ)も久しぶりに賑やかだった」

おばあさんは小休止になると男に聞かせるように話した。

「まさか、今朝に空襲があるなんて誰も想像さえしなかった」

「今朝、床から起きると娘が、演習が始まったみたいよって言うんで、外へ出てみたら、飛行機が何機も飛んで行った。高射砲の音も交じって、本当に演習が始まったと思った。それにしてもいつもの演習と違うねって娘と話していたら、突然飛行機の大群が低く飛んできて、ダダダダと撃ってきた。味方でなく敵の飛行機だった。廓のあっちこっちで火の手が上がり、危ないし怖いので消火どころではない。みんな着の身着のまま波の上宮の方に逃げた。床下に防空壕を掘ってもあるけど、家が燃えたら役に立たん。ジュリ娘たちに急いで遠くにお逃げと送り出し、足の悪いわたしは家に残ることにした。この娘だけはどこにも行かんよとそばを離れない。いずれ家も火の手が回る。居たらこの娘の命も危ない。行けるとこまで逃げようと二人で家を出たところでアンタさんに助けられた。」

「そうだったんですか」

「アンタさんは本土の方だろうね。なんでまた、真っ昼間に中道など歩いておった？」

「僕にもわからんです。まるで夢を見ているみたいで」

上之蔵通りを下り切ると交差点になり、左手には市役所に続く道がある。

あたりの家々はまだ焼けずに無事のようにだが、市役所方面にはすでに火の手が上がっているのか、もうもうとした煙が立ち上っていた。

その上空を敵の飛行機が飛び回っている。

「市役所に行っても却って危ないから、迂回しましょう」

男はおばあちゃんを背負い、娘を先に歩かせて、左手の小道を再び登り始めた。するとグラマンの編隊が辻遊郭の方向に、爆音を響かせ飛んで行った。

時折、ドカーンという爆撃音が聞こえ、あたり一帯が煙ってきた。

歩いて先に進むにも息が苦しくなりはじめた。

大きなガジュマルの木の陰に三人は身を寄せ、しばし休むことにした。

周りの家々に人の気配はない。

「アンマー(お母さん)? わたし、お水を探してきます」

娘が突然口をきいた。

「チルー、お願いね」

娘は路地伝いに家々を訪ねて水乞いをしているようだった。

「娘さんの名はチルーというんですね」

男は驚くような言い方をした。

「沖繩では子供の名前にツルとかカメとかつけたものです。チルーは鶴で好んで付けられました。たくさんのチルーがいるので珍しくありません」

「吉屋チルーをご存じで」

「ええ。知っていますよ。仲島のジュリで有名な歌人でした。わたしたちジュリ仲間のあこがれでもありましたよ。あの子も吉屋チルーと同じ読谷村の生まれで、8歳の時に売られてチージに来ました。たまたま最初のアンマーが病で亡くなり、私が代わりに引き取り育てました。十三歳になりますが、情の厚い子でよく私の面倒を見てください」

「戦争がなければチージも平和な女社会でしたが、戦争が始まってからは客足も途絶えがちで300年続いたチージの歴史も私の代で終わるのでしょね」

チルーが水を入れた器を手にして戻ってきた。

「家には誰かいたの？」

男はおばあちゃんに飲ませ、自分も口にしたあと娘に返しながら聞いた。

「誰もいないので庭に入って井戸で汲んできたの」

火の手から逃れて、少しはこの先に安ど感を感じたのか、娘が微笑みを浮かべた。その時、一瞬、男はどこかで見たことがある顔だと感じた。

三人は再び安全な場所を求めて歩き始めた。
右手の市役所あたりは火の海なのだろう。

男は濛々と立ち上る煙と熱気とで、那覇一帯がいずれ炎上するのを肌にした。
火に巻き込まれないうちに一刻も早くここを脱出しなければならぬ。

おばあちゃんを背負い、娘に押されながら、歩きに歩いた。

そしてようやく広い通りにでた。

左角には孔子廟があり、避難してきた人々がしばし休んでいる。

通りの向こうには川らしい土手が見え、石の橋が架かっている。

久茂地川の向こう岸には煙らしいものがない。

どうやら逃げ切れたらしい。

男は二人の手を引いて大通りを横切り、橋のたもとにやって来た。

泉崎橋の上は避難してきた人々が大勢いて向こう岸へ渡ろうとしている。

「この橋を渡ればもう安心です」

敵機が相変わらず上空を飛びまわっている。

時折、近くで機関銃の音がする。

見つからないように軒伝いを歩く。

この辺りも火の海にならないとも限らない。

なんとか今日中に高台の安全な場所へこの二人を連れて行かねばならない。

荷車を引いた男女に行先を訪ねると県立二中に行くという。

広い校庭があるから少しは安全だろう。

校舎は陸軍の兵舎になっていて何か食べ物があるかもしれない。

そういえば二人とも何も食わずに歩いてきたから腹を空かしているに違いない。

男は荷車の男女に頼んでおばあちゃんを荷台に乗せてもらい、一緒に二中まで連れて行ってもらったことにした。

そこは市内に比べてかなりの高台で、建物はまだ全く損傷がなく、市内とは比べ物にならないほど静かだった。

時折敵機が頭上を飛んでいくものの、機銃掃射や爆弾投下もしない。

校庭には多くの避難してきた人が集まっていた。

兵舎の一階では握り飯と水が配られ、三人はそれを食べて少し元気を取り戻した。

夕方五時を過ぎると敵機はすべて姿を消し、那覇市内の方向にあたる西の空が、落ち行く夕日とともに赤く染まりはじめた。

その赤色は時間とともに次第に血の色に変わり、陽が落ちても暗闇になることはなかった。

その夜三人は兵舎の板の間で仮眠をとった。

寝付けずにおぼあちゃんが小声で男に言った。

「大和の男に命を助けてもらったねえ。ありがとう」

「・・・」

「今度の戦争も大和が始めた。琉球は何百年も大和に虐げられてきた。琉球の民はやさしいけど、決して心から大和を許してはいない。わたしも沢山の男を見てきた。一人一人はいい人ばかりなのにね」

「この娘もジュリになる運命だったけど、辻遊郭がなくなり、これでジュリにならずに済むでしょう。でもこの先どうやってこの娘が一人で生きていけば良いのか、わたしは心配でならないの」

翌朝、目を覚ますと人々の話が耳に飛び込んできた。

那覇市街は昨日からの火が広がり続け、すぐそばまで迫ってきているという。

三人は兵舎を出て比較的安全な北の方向へと歩き始めた。

壺屋から牧志を経て崇元寺。

おぼあちゃんの知り合い宅のある泊高橋についたころはもう昼を過ぎていた。

「よく無事で生きていたね。良かった良かった。さあ、お上がんなさい」

そう言つて主人が三人を二階の部屋に案内した。

主人は締め切つてあつた板戸の窓を開けた。

泊一帯はなだらかな傾斜地で、その中ほどにある知人宅からは焼け野原と化した那覇市街が一望できた。

沖繩らしいすがすがしい風が一瞬開けた窓から吹き抜けた。

あとにはあの空襲が、まるで嘘であつたかのような穏やかな空気が漂つた。

階下では主人が突然の客をもてなす料理を作つていた。

「さぞかし空腹でしょう。こんな時なので何もないが、どうぞ腹いっぱい召し上がってください」

三人は感謝して頂いた。

「二階は空いているので、いつまでも居てください」

主人がこの先のことを心配し、滞在をすすめてくれた。

「ありがとうございます。でも明日には北の方向に出て、読谷村のこの娘の実家にひとまず身を寄せようと思います」

おばあちゃんが丁寧に答えて言った。

「そちらの旦那さんは本土の方かね？」

「そうなのです。見知らぬ本土の方が、わたしたち二人を助けてくれたのです」
「で、旦那さんはどうなさる？」

「わたしはなぜここにいいのか、どこから来て、どこに帰るかもわからないのです。だから明日は辻遊郭の焼け跡に行ってみようと思っています」

昨日(1944年10月10日)は火曜日である。

早朝から勤務に街中へ出勤した人々は生きてわが家に帰れたのだろうか。

辻遊郭のジュリたちやおばあちゃんのようなアンマーたちは生き延びてくれたろうか。

おばあちゃんはそのことばかりを口にして心配した。

「首里には日本軍がいるから、いずれ那覇も戦場になるだろう。わたしたち沖縄人はそうなる前にヤンバル(山原)へ逃げるか、九州に疎開しないといけなくなつた。ア

ンタさんが助けてくれた命を大事にして生き延びないと申し訳ない。この娘のためにもわたしが頑張らないとね」

そう言っておばあちゃんは男の手をそつと握った。

男と娘は開け放った二階の窓台に腰を掛けた。

眼下の那覇市街はまだ燃え続けている。

いつもなら満天の星も、燃える夜火の明かりで一つとして見えない。

ただ下弦の月が夜空高くに出て、目を細めるように下界の惨状を見つめているだけである。

「那覇の月、か〜」

男はため息のように一言つぶやいた。

《なぜ、男は戦争をするのだろう。きつと太陽がそうさせるのかもしれない。男が太陽なら、女は月。男の身勝手が産んだこの惨状も、時間がたてばいずれ女が癒してくれるのだろう》

男はポケットから小さなハーモニカを取り出して吹き始めた。

十九の春を 花ぬ島

父さん母さん すこやかに

年に一度の ジュリ馬祭り

シャンシャンシャンの 鈴の音は

シャンシャンシャンの 鈴の音は

哀しい女の さだめ唄

踊りも三線(しゃみ)も 覚えたの

育ててくれた アンマーに

吉屋の鶴(チルー)の 恩返し

シャンシャンシャンの 鈴の音は

シャンシャンシャンの 鈴の音は

売られた女の さだめ唄

銀のかんざし 辻(チージ)の華

生きて添えない あの方に

せめて一夜の 慰めを

シヤンシヤンシヤンの 鈴の音は
シヤンシヤンシヤンの 鈴の音は
尽くす女の さだめ唄

娘チルーは窓の外に目をやり、静かに男のハーモニカの音を聞いていた。

翌朝、姿が見えなかった娘チルーが、手にススキのような葉を持って階段を上がってきた。

そのススキを二つに折り、片方をもう一方に手際よく結ぶと、お祓いのようなしぐさ二度三度したあと男の手に握らせた。

「これ、サングワールと言うの。沖繩のお守りよ。アナタ様の厄除けにお持ちください」

「……」

「娘の感謝の気持ちです。貰ってやってください」

そう、おばあちゃんも言った。

「そうか。ありがとう。頂くよ」

「では、これでお別れですね」

「生きていたら、きっとまた会えるよ」
「さようなら・・・」

二十九 奉納

長い眠りから覚めた東山は、しばし起き上がることができないでいた。何という不思議な夢を見ていたのだろう。

まるで今の今、現実を起こっているような鮮明な夢・・・。

辻の復元が完成し、疲れ切った彼はその場で眠ってしまったのだった。

すると魂だけが彼の体を離れ、過去にタイムスリップしてしまっただけに違いない。

これはまさしく霊夫人の導きだろうか。

東山は漸く立ち上がり、顔を洗いに洗面所に向かった。

入ると鏡に映る自分の顔をじっと見つめた。

疲れて見えるが、ことをやり遂げた満足感がある。

顔を洗おうとひよつと頭を下げた。

なんと、そこには・・・。

「霊夫人さま

本日、大願を果たすことができました。お陰様で辻遊郭の建築イメージを復元いたしましたことをご報告しますとともに、貴女様の墓前にその成果物をお捧げします。拙い作品ではありますが、沖縄の皆さんのお役に立つならば、これほどうれしいことはありません。またこの作品をご覧になる方々の間で、辻遊郭に対する正当な評価に向けての関心と議論の深まりを期待してやみません。

今日まで僕を支えて下さったことを心より感謝申し上げます。

これをもつてひとまずプロジェクトを終わらせていただきます。

安らかに眠りください。東山より」

三十 妹

あれから一年が経ち、今年も「慰霊の日」の夏がめぐってきた。

沖縄の夏は蝉嵐とともに始まる。

絶え間ない蟬嵐は、絶えることのない沖繩の人々の悲しみ声に、東山には聞こえてならない。

そんな寂しい気持ちの中、霊夫人の妹の店「みやび」がリニューアルオープンする、という通知が届いていた。

オープン予定はとうに過ぎていたが、その慰霊の日を終えてから東山様を特別にご招待したいという内容であった。

その日、彼は白百合の花束を抱え、妹の待つ店を訪れた。

エレベータを降りるとそこには一人の妙齢な女性が多くの花に囲まれ、入り口を背に彼を待っている。

そして彼を見るなり、「ようこそ。東山様」と笑顔で近づいて手を差し伸べたのだ。

「え・・・」

東山は絶句し立ち止まった。

なんと霊夫人は生きていたのか。

「驚かれましたでしょ。東山様」

「嗚呼・・・」

「妹ですわ。姉とは双子でしたの」

完

あとがきにかえて

現在の沖縄県はかつて琉球王国であった(1429年～1879年の450年間)。中国と大和の間に位置する南海の島々は交易で栄え、人々は平和に暮らしていた。だが1609年大和の薩摩藩島津氏が侵攻し、武力に劣る琉球王国は事実上崩壊してしまう。以来農村の暮らしは困窮を極め、やむを得ず子女を売るものが続出した。大和支配が皮肉にも遊郭の村「仲島(ナカシマ)」や「辻(チージ)」を生み育てることとなっていたといわれている。

1672年、王国は琉球各地にいた多数の娼婦たち(ジュリ(尾類)と呼ばれていた)を現在の那覇市辻町一帯に集め、芸芸の教養を身に付けさせ、冊封使や大和商人のもてなしをする遊郭を作ったのである。その昔王国の都首里芸能は男性中心の文化であったが、辻の女性たちによって現代の女性中心の琉球芸能文化が育まれた。そんな辻遊郭も沖繩戦の十・十空襲で全焼し、一夜にして300年の歴史を閉じてしまったのである。

辻遊郭では、育て親(アンマー)が親代わりとなり、ジュリたちは実の親に会うことが許されなかった。そこで年に一度、女たちが馬を模した衣装を身に着け、シャン

シャンシャンと鈴を鳴らし、行列をなして街路を踊る奉納祭りが行われた。その日だけは生みの親が遠方から来て、遠目でわが子の無事を見ることができたという。今も毎年その祭りだけが保存会の手で残されている。しかし娼婦社会と蔑視された辻遊郭の歴史は、戦後沖繩の社会では否定されてきたという。戦後ブルドーザーで均された現在の辻一帯には当時の御嶽(ウタキ)以外に時代を偲ぶものは何一つない。虐げられながらも力強く生きた琉球女性たちの生きざまに歴史の正しい評価がなされないまま、いずれ人々の記憶から消え去ろうとしている。辻遊郭の存在は大和侵攻、先の沖繩戦、米国統治から現代もなお基地の島として続く沖繩の人々の苦難の歴史そのものではなかったか。

本書は小説の形をとるものの、沖繩の失われた女性社会「辻遊郭」を現代人の記憶に呼び戻したい一人の大和人の良心の呵責にも似た作品である。何分にも力不足のため、十分に思いを伝えられず、沖繩の人々の輦蹙(ひんしゆく)を買うことになるかもしれないが、それをも敢えて恐れず声を上げさせていたただいた次第である。

最後に、友人として本書発刊に良きアドバイスを下さった今は亡きジャパンブック社長の大村数一氏、執筆と制作にお力をくださったすべてのの方々はこの場をお借りして厚く御礼を申し上げます。

2018年5月

沖繩県那覇市にて